



**Nursing and Laboratory Science
Graduate School of Medicine
Yamaguchi University**

Research 2023



山口大学大学院 医学系研究科 保健学専攻 研究者紹介

2023

あいさつ

保健学科・保健学専攻の 研究をご紹介します

山口大学大学院医学系研究科保健学専攻長
山口大学医学部保健学科長

野垣 宏



山口大学医学部保健学科が設置されて22年、大学院医学系研究科保健学専攻博士後期課程が設置されて16年が経過しました。前身の医療技術短期大学部時代からその学生教育のレベルの高さは山口大学内で定評があり、今でもその良き伝統は受け継がれています。一方、研究に関しては文部科学省科学研究費の採択率は他の学部・学科に決して劣っている訳ではありませんが、少しアピール不足のところがあり、他の学部の教職員からはどのような研究をしているのか、あるいはその研究内容がよくわからない、という声を時折耳にすることがあります。また、同じ医学部内の医学科に在籍していた私からすると、医学科と比べると確かにその規模、財力、研究力、発信力はまだ不十分であり、研究面におけるさらなる発展のためにも、もう一皮剥けなければならないと感じております。

どの研究分野もかつては、同じ講座・分野の同僚（いわば身内）たちだけで研究組織を構成することが多く、私もそのような風土のもとで細々と研究を行ってまいりました。しかし、今は「異分野融合」「ダイバーシティ」「グローバル化」「ビッグデータ」などのキーワードが飛び交い、学問や研究の世界にもバリアフリー化が求められています。同じ専門分野の研究者だけからなる研究グループはもはや時代遅れの感すらいたします。

これまででは本学科、専攻は、国際化を旗印に国際交流（APAHL）や独自の英文ジャーナル（Nursing and Health Sciences）で少し知られた存在でしたが、今回お届けする研究者紹介冊子が、保健学科・保健学専攻全体、および所属する教員個々の研究内容を皆様にご覧いただき、きっかけになることを期待しております。お目通しいただき、興味を持っていただける研究内容がありましたら是非、該当する教員にお声掛けいただければ幸いに存じます。

目次

■ 看護学領域

- 02 基礎看護学
- 04 臨床看護学
- 07 母子看護学
- 09 地域・老年看護学

■ 生体情報検査学領域

- 13 基礎検査学
- 17 病態検査学
- 22 保健学専攻

23 研究紹介

■ 索引

- 24 人名・SDGs
- 26 キーワード
- 28 山口大学の研究支援体制
- 29 大学院についての案内

凡例

各学科等の研究紹介ページの見方

領域名	講座名	研究者の行っている研究の一例を写真や図と共に紹介	持続可能な開発目標(SDGs)のうち、研究の発展が解決に結びつく目標
看護学領域	基礎看護学 Fundamental Nursing	<p>人生の最終段階を安心して過ごすためのケアとケアリングとケア体制の構築</p> <p>2025年には「団塊の世代」800万人が後期高齢者となり、死亡数が増加し、「多死社会」と呼ばれる時代が到来します。近年、家族形態や疾病構造の変化、医療やテクノロジーの進化に伴い、人生の最終段階の医療にも変化が生じてきました。こうした様々な要因を背景とした多死社会において、最期の時までその人らしく生きていくことのできるケア体制とはどのようなものでしょうか。人生の最終段階のケアを考えることは、その期間だけではなく、暮らし方、家族や友人や地域、価値観などを含めたその人の人生と生活にケアの視点を充てる必要があります。このような課題について、さまざまな場で看護活動を行う仲間とともに、研究を展開しています。加えて2022年からは、看護の核となるケアリングについて哲学的分析による探究を始めました。今後の目標は、安心して最期を迎えることのできる人生最終段階におけるケア体制の構築と、社会の仕組みづくりです。</p>	
キーワード	<ul style="list-style-type: none"> ・ 終末期ケア (人生の最終段階のケア) ・ 生活関係の清算 ・ 笑いとユーモア 	<p>田中 愛子 教授 Tanaka Aiko</p> <p>1992年佛教大学通信教育課程社会学部 社会福祉学科 1995年常磐大学人間科学研究科修士課程修了(修士:人間科学) 2002年山口大学医学研究科博士後期課程修了(博士:医学) 山口県立大学看護学部助手、(略)同教授を経て2015年より山口大学教授となる。</p>	
検索時に役立つ、研究に関わる主なキーワード	研究者のプロフィール	山口大学研究者紹介 または研究者WEBサイトのQRコード	

領域名

講座名

研究者の行っている研究の一例を写真や図と共に紹介

持続可能な開発目標(SDGs)のうち、研究の発展が解決に結びつく目標

看護学領域 基礎看護学 Fundamental Nursing

人生の最終段階を安心して過ごすためのケアとケアリングとケア体制の構築

2025年には「団塊の世代」800万人が後期高齢者となり、死亡数が増加し、「多死社会」と呼ばれる時代が到来します。近年、家族形態や疾病構造の変化、医療やテクノロジーの進化に伴い、人生の最終段階の医療にも変化が生じてきました。こうした様々な要因を背景とした多死社会において、最期の時までその人らしく生きていくことのできるケア体制とはどのようなものでしょうか。人生の最終段階のケアを考えることは、その期間だけではなく、暮らし方、家族や友人や地域、価値観などを含めたその人の人生と生活にケアの視点を充てる必要があります。このような課題について、さまざまな場で看護活動を行う仲間とともに、研究を展開しています。加えて2022年からは、看護の核となるケアリングについて哲学的分析による探究を始めました。今後の目標は、安心して最期を迎えることのできる人生最終段階におけるケア体制の構築と、社会の仕組みづくりです。



地域包括ケアシステムと生活者目線の看護ケア施設間連携を取りながら、それぞれの看護活動の場において、その人へのケアのあり方をともに考察する。

キーワード

- ・ 終末期ケア (人生の最終段階のケア)
- ・ 生活関係の清算
- ・ 笑いとユーモア



田中 愛子 教授
Tanaka Aiko

1992年佛教大学通信教育課程社会学部 社会福祉学科
1995年常磐大学人間科学研究科修士課程修了(修士:人間科学)
2002年山口大学医学研究科博士後期課程修了(博士:医学)
山口県立大学看護学部助手、(略)同教授を経て2015年より山口大学教授となる。



検索時に役立つ、研究に関わる主なキーワード

研究者のプロフィール

山口大学研究者紹介
または研究者WEBサイトのQRコード

人生の最終段階を安心して過ごすためのケアと ケアリングとケア体制の構築



2025年には「団塊の世代」800万人が後期高齢者となり、死亡数が増加し、「多死社会」と呼ばれる時代が到来します。近年、家族形態や疾病構造の変化、医療やテクノロジーの進化に伴い、人生の最終段階の医療にも変化が生じてきました。こうした様々な要因を背景とした多死社会において、最期の時までその人らしく生きていくことのできるケア体制とはどのようなものでしょうか。人生の最終段階のケアを考えることは、その期間だけではなく、暮らし方、家族や友人や地域、価値観などを含めたその人の人生と生活にケアの視点を充てる必要があります。このような課題について、さまざまな場で看護活動を行う仲間とともに、研究を展開しています。加えて2022年からは、看護の核となるケアリングについて哲学的分析による探究を始めました。今後の目標は、安心して最期を迎えることのできる人生最終段階におけるケア体制の構築と、社会の仕組みづくりです。



地域包括ケアシステムと生活者目線の看護ケア
施設間連携を取りながら、それぞれの看護活動の場において、その人へのケアのあり方をともに考察する。

キーワード

- ・終末期ケア (人生の最終段階のケア)
- ・生活関係の清算
- ・笑いとユーモア



田中 愛子 教授
Tanaka Aiko

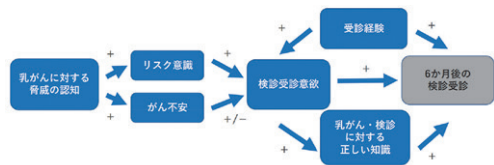


1992年佛光大学通信教育課程社会学部 社会福祉学科
1995年常磐大学人間科学研究科修士課程修了(修士:人間科学)
2002年山口大学医学研究科博士後期課程修了(博士:医学)
山口県立大学看護学部助手、(略)同教授を経て2015年より山口大学教授となる。

心理的要因が心身の疾患に及ぼす影響と 対人関係療法による介入効果の検討



主に2つの分野で研究を重ねてきた。1つ目は、うつ病を中心とした精神疾患に対する対人関係療法の有効性についての臨床研究である。これまでの臨床実践と研修実績が認められ、2022年7月に国際対人関係療法学会公認のスーパーヴァイザーに認定された。近年では、対人関係療法を土台とした産後うつ病予防プログラムのわが国導入に向けた基礎研究に従事すると同時に看護師の対人関係療法修得のためのトレーニングにも関心を持っている。2つ目は、がんを中心とした身体疾患の経過に関与する心理的要因の抽出と、得られた知見に基づく心理的介入の効果研究である。特に乳がん検診受診行動に関与する心理的要因として乳がんに対する病気認知、危機意識、がん不安を抽出し、こうした要因が乳がん検診受診行動にどのように影響するのか吟味を重ねてきた。また近年では、コロナ禍における心の問題にも関心を持っている。



乳がん検診未経験女性(40～69歳)約1,000名を対象とした検診受診行動のバスマデル

キーワード

- ・対人関係療法
- ・うつ病
- ・マンモグラフィ検診
- ・病気認知
- ・新型コロナウイルス感染症

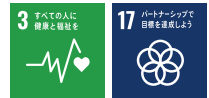


安達 圭一郎 教授
Adachi Keiichiro



大分大学大学院医学系研究科生体防御医学専攻博士課程修了 博士(医学)。
1986年より11年間、臨床心理士として病院臨床(精神科・心療内科)に従事。
1997年4月～2017年3月 主に心理学系大学で教育研究活動と臨床活動に従事。
2017年4月より山口大学大学院医学系研究科保健学専攻教授。

共有意思決定によって 患者の価値観に基づいた意思決定を支援する



治療選択や療養場所の選択など、医療を受ける患者やその家族は様々な意思決定を迫られます。選択する内容が深刻であったり、複雑であったりするほどに、その決定には困難が伴います。患者のニーズと医療の最善が不一致である場合や、患者と家族のニーズが不一致である場合、患者や家族だけでなく、それを支援する看護師にも葛藤が生じることがあります。私は、患者の価値観に基づいた意思決定支援を進めるために、共有意思決定支援について研究しています。意思決定ガイドを用い、与えられた選択肢の利点と欠点を整理して、それぞれがもたらす影響を患者や家族の価値観と照らし合わせながら進める共有意思決定支援においては、看護師に非指示的に患者や家族を支えるコーチングスキルが求められます。患者や家族のより質の高い意思決定を支えられるように、看護師の方々と勉強会を開催しながら看護師のコーチングスキルを向上させることを目指しています。



勉強会の様子

キーワード

- ・ 共有意思決定
- ・ 意思決定ガイド
- ・ コーチングスキル



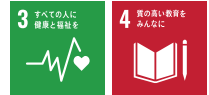
小野 聡子 准教授

Ono Satoko



2011年 川崎医療福祉大学大学院医療福祉学研究科保健看護学専攻修士課程修了
西南女学院大学保健福祉学部助教、川崎医療福祉大学保健看護学部講師を経て、2022年 山口大学大学院医学系研究科保健学専攻基礎看護学講座准教授に着任

心の可視化によって目指す看護・医療における質の向上 ～視線計測や心拍変動解析によってみる・明らかにする人間心理～



看護は患者さんの心に寄り添い患者さんの生命を護る役割がありますが、患者さんのこころは目に見えないものが多いです。「目は口ほどに物を言う」ということわざもあるように、視線計測を用いて患者さんや学生さん、実際に働く看護師の視線の動きから、その人の心を考える事ができるのではないかと思ひ研究しています。また人の心と体の動きを調整しているものに自律神経があります。この自律神経のバランスを解析する心拍変動解析によって心の動きを数値として可視化することの有用性を検証しています。これらの研究から看護や医療の根拠を見直し、より良い看護の提供を目指しています。また視線計測や心拍変動解析を用いることで、学生がより直感的に教員や看護師が「何を見ているか」や「どのような視点が不足しているのか」を考えることができるようになり、学生が看護や医療に興味を持ち自ら考え学習していく事を支援するために研究を進めています。



視線計測（アイトラッカー）を行った研究の例
(制限がありベッド上で食事を摂取する患者の視線を可視化することにより何が見えているか理解しケアの検討につながる)

キーワード

- ・ アイトラッカー
- ・ 心拍変動解析
- ・ 手術室看護
- ・ ICU せん妄
- ・ 可視化

桐明 祐弥 助教

Kiriake Yuya



2011年 聖マリア学院大学看護学部看護学科 卒業
2013年 聖マリア学院大学大学院看護学研究科看護学専攻 修士課程 卒業
2013年 佐賀大学医学部附属病院 入職
2019年 山口大学大学院医学系研究科保健学専攻の助教として入職し現在に至る

がん予防とがん患者・家族のセルフケア能力を高めるための支援



がんは、二人に一人が罹患する疾患です。遺伝する場合がありますが、原因の大半は生活習慣が影響することが研究により明らかになっています。現在では検査・治療の発展で生存率が高くなり、「がん=死」と思っている人は少なくなっていますが、がんは恐ろしいと捉える人も、なお多く見られます。そこで、がんに対する正しい知識、がんになりにくい生活習慣を身に付けていけるよう、山口大学公開講座でがん予防の講義・実習を毎年実施しています。がん患者は治療の過程で幾度も意思決定を行い、治療を継続します。そのため患者のQOLが低下しやすく、その維持・向上のため、乳がん患者への支援について大学病院の医師と共同研究を行っています。また、がん患者の家族も同様にQOLが低下するため、家族の支援プログラムの構築に関する研究を行いました。現在は、AYA世代のがんに対する一般の人々や医療者の認識に関する調査を行うとともに、AYA世代がん患者・家族の支援プログラムの構築について宇部市と共同で研究しています。



毎年実施しているがん予防のミニ講座(山口大学公開講座)

キーワード

- ・がん
- ・予防
- ・生活習慣
- ・QOL
- ・セルフケア



齊田 菜穂子 教授

Saita Nahoko

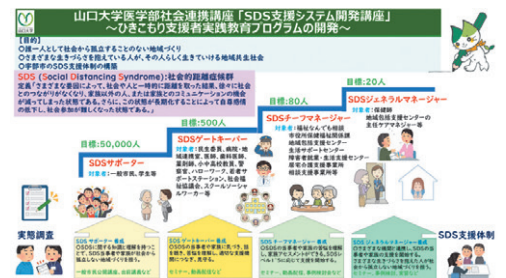


2009年 広島大学大学院保健学研究科博士課程後期 修了
1986年~1995年 久留米大学医学部附属病院で看護師勤務
1995年 久留米大学医学部看護学科助手、2002年 山口大学医学部保健学科助手、山口大学大学院医学系研究科保健学専攻臨床看護学分野講師、准教授を経て、2009年から同教授となる。

SDS 支援システム開発 ～誰一人孤立させない社会をめざして～



現在、ひきこもり者は、約115.4万人と推計され、その長期化と親の高年齢化が課題になっています。80代になってもなお親の年金で50代の子どもの面倒を見なくてはならないといった、いわゆる「8050問題」が深刻化しています。しかし、「ひきこもり」に対する誤解や偏見によって相談ができずに孤立している家族の存在、また仮に相談窓口にとどり着いたとしても支援者の理解不足からたらい回しにされ、適切な支援が受けられないといった実態も明らかになっています。2015年より宇部市と協働で「ひきこもり支援体制」を構築してきました。家族相談・家族心理教育(基礎編+実践編)・アウトリーチ・居場所支援・社会参加支援を一体的に行うことで、家族関係が回復しました(山根モデル)。現在は「SDS支援システム開発講座」を開設し、ひきこもりに関わる支援者の人材育成と支援体制の充実を図ることによって、誰一人として孤立することのない地域づくりを目指しています。



山口大学医学部は、宇部市と連携して地域の課題を解決するために、「SDS支援システム開発講座」を設置しました。

キーワード

- ・メンタルヘルス
- ・ひきこもり
- ・Social Distancing Syndrome
- ・家族心理教育
- ・リカバリー



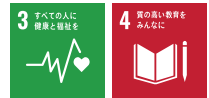
山根 俊恵 教授

Yamane Toshie



1982年~1997年 総合病院精神科、精神科病院(精神科認定看護師)
1997年~2004年 在宅介護支援センター(介護支援専門員)
2004年~現在 山口大学大学院医学系研究科(2010年より教授)
2005年~現在 NPO法人ふらっとコミュニティ(理事長)
「精神障害者」および「ひきこもり者」とその家族の地域支援

臨床実践に基づいた看護師の 呼吸ケア実践能力の解明と評価ツールの開発



2020年COVID-19の流行により、急性呼吸不全を呈する患者が急増しました。急性呼吸不全を呈する重症患者管理は、呼吸機能低下に対する気管挿管下での人工呼吸管理が主です。最重症例では、体外式膜型肺（Extracorporeal Membranous Oxygenation：ECMO）による管理が行われます。そのため人工呼吸ケアを担当する看護師の需要は必然的に高くなりましたが、その力を有する看護師の不足は全国的な問題となりました。その理由として、人工呼吸管理はICUに任されてきたこと及び基礎教育において全般的な教育となっていないこと、ICUにおいてもその実践能力は経験学習に基づいてきたため客観的に評価するものがないことが考えられます。そこで、本研究では人工呼吸ケアを行う上での実践能力の解明と評価ツールの開発を目指しています。人工呼吸ケアの実践能力の解明として、ICU看護師が人工呼吸ケアを行った際の視線を、アイトラッカーを用いて明らかにしました。また実践能力の抽出後は全国の看護師がどこにいても利用できるツールとしての開発を目指しています。



人工呼吸中の患者の様子を再現したシミュレーション時のアイトラッカーの映像です。

キーワード

- ・重篤・救急看護学
- ・集中治療医学
- ・教育方法
- ・教育評価
- ・非言語コミュニケーション



田戸 朝美 准教授

Tado Asami



平成13年(2001)山口大学医学部附属病院集中治療室看護師
平成19年(2007)山口大学大学院医学系研究科保健学専攻助手
平成25年(2013)急性・重症患者看護専門看護師(登録番号 1034号)取得
平成29年(2017)山口大学大学院医学系研究科保健学専攻准教授
平成31年(2019)山口大学大学院医学系研究科保健学専攻博士後期課程 修了(保健学博士)

その人らしく生きるを支える看護 ～どう生きるかはどう死を迎えるか～



看護とは、「人生のあらゆるシーンでその人が思い描いている“自己実現”を支援するもの・支援できるもの」と考えます。人生のさまざまなシーンのなかでも「いかにその人らしく人生を全うできるか、いかにその人らしい死を迎えることができるか」、その人らしい最期を叶えるのが終末期看護です。人は成長し続ける生きものですが、マズローの欲求5段階説の自己実現で、ひとが最期まで譲らずたいせつにしたいと願う自己実現は、「真」、「善」、「正義」、「秩序」といったその人の「生きざま」や「信念」を貫くことであると思います。それを守り死を迎えられることは、その人にとって望む生き方を全うできることであり、それを見送る家族も安らかにその死を受け入れることができると考えます。ひとりでも多くのひとがその人らしく生き、その命を見送るひとりでも多くのひとがその死を意味のあるものと感じられるような看護を追究していきたいと考えています。

わたらしく
生きる
を
支える
看護

キーワード

- ・終末期看護
- ・がん看護
- ・悲嘆
- ・ケアノード
- ・家族ケア

江藤 亜矢子 講師

Eto Ayako



島根大学理学部化学科卒業
鳥取大学医療技術短期大学部看護学科卒業
山口大学大学院医学系研究科保健学専攻博士前期課程修了
山口大学大学院医学系研究科助教を経て現在の講師に至る。
生まれ育った宇部市の山口大学で教育・研究に携われることに感謝しています。

脳死下臓器提供する患者家族ケア

クリティカルケアとは、突然の事故や疾病、大手術などで危機的状況に陥っている重症患者さんとその家族に対するケアのことです。クリティカルケアでは、重症患者の全身管理、早期回復についての知識・経験が求められクリティカルケア看護の重要性は年々高まっています。研究者はこれまでにクリティカルケアに関連する研究をしてきました。中でも臓器移植は、臨床の経験を活かし他施設や関連機関と共同で研究に取り組んでいます。わが国では、2010年改正臓器移植法により脳死下臓器提供が増えていますが課題もあります。私は、臓器移植に関わる看護師や医師などの医療チームと臓器提供した家族の思いなどを研究しています。臓器提供に関わる医療者は、患者家族の臓器提供に関する意思確認や患者家族ケアの難しさを感じています。また家族も最愛の家族を失う悲しみの中で臓器提供について考えるという負担があります。これからも患者家族の意思を尊重し臓器移植が円滑に行えるようなシステムの構築や教育を研究していきます。



臓器提供における患者家族ケアの充実を目指す



臓器提供する患者家族を支えるために必要な要素

キーワード

- ・クリティカルケア
- ・臓器移植
- ・家族ケア
- ・専門看護師

山本 小奈実 助教

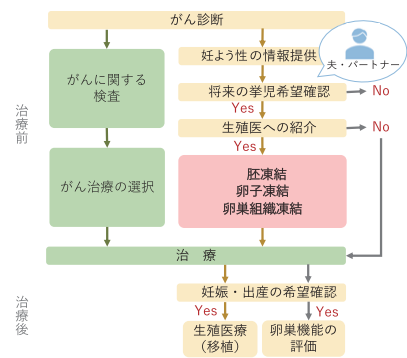
Yamamoto Konami



2011年 山口大学医学系研究科保健学修士課程修了
2011年 急性・重症患者看護専門看護師を取得
2013年 山口大学臨床看護学講座助教

がんに罹患した女性の妊よう性に関する意思決定への支援

がんは2人に1人が罹患するといわれ、若い女性の患者さんも増加しています。抗がん剤などがん薬物療法は妊よう性（妊娠する力）を低下させるため、がん患者さんは治療前に卵子凍結や胚凍結など生殖医療を行うことがあります。しかし、がんの診断直後は精神的ショックが大きく、がんの治療に加えて生殖医療のことまで考えることには大きな困難を伴います。近年、患者さんが治療を決めるプロセスとして、共有意思決定支援（SDM）が広まっています。これは、医療者からの一方的な情報提供で終わるのではなく、治療選択肢のメリットとデメリットを含む十分な情報提供がなされたうえで、さらに患者さんのライフスタイルや価値観を医療者も共有しながら決定をしていくというものです。このSDMを参考に、がん診断から治療までの短い期間においても、治療の前に妊よう性に関して患者さんが納得して選択し、できる限り後悔が残らないような意思決定支援を目指して研究しています。



がん罹患した患者さんの妊よう性に関する意思決定プロセス

キーワード

- ・がん看護
- ・妊よう性
- ・意思決定支援
- ・実践知



紙谷 恵子 助教

Kamitani Keiko



1989年 福岡大学附属看護専門学校卒業
1994年 福岡大学商学部第二部商学科卒業
福岡大学病院脳神経外科病棟、救命救急センター勤務
2017年 福岡大学大学院医学研究科修士課程看護学専攻修了
福岡看護大学助手を経て2019年より現職

Person-centered Care を実践する 看護職を支える看護教育・研究への取り組み



小児看護学、および遺伝看護の教育・研究者として、活動をしています。山口大学医学部附属病院産婦人科外来で出生前検査の研修、現在は遺伝診療部に診療補助従事者としてカンファレンスに参加しています。子どもや家族が自分自身で心豊かな生活を送れるように、エンパワメントできる看護実践、そして看護教育を目指しています。2008年より、「山口県遺伝看護教育プロジェクト」を立ち上げ、一般看護職を対象とした活動を行っています。遺伝学的課題を持つ人々の対象理解（遺伝に関する知識、心理的側面）、倫理的課題に対する理解と問題解決（医療者の倫理的葛藤の緩和）、家族の調整、多様性の理解などの側面から事例検討会（セミナーおよび懇談会）の活動を行っています。COVID-19の流行により活動がほとんどできていませんが、オンラインなどのツールを活用しながら少しずつ実施したいと思います。



「山口県遺伝看護教育プロジェクト」の様子です。関心のある仲間が集まり、それぞれの学びを積み重ねています。

キーワード

- ・看護学
- ・看護教育
- ・小児
- ・遺伝
- ・家族

村上 京子 教授

Murakami Kyoko



看護師、助産師、社会福祉士の資格を持ち、山口大学医学部保健学科で小児看護学、および遺伝看護学を担当しています。子どもと家族を中心とした看護の向上のために看護学生や看護職の教育的支援ができるよう取り組んでいます。エビデンスに基づいたクリティカル・シンキング、そして楽しく学んで実践ができることを目標としています。

健康課題に関する意思決定支援と 女性のライフコースに活かすヘルスプロモーション



患者／妊産婦／利用者の医療の意思決定に家族が大きく関与し、おかれている状況で意思決定のあり様は変化するため、継続した探求が必要であり、研究しています。予測がつかない状況での治療の選択や検査の受検、エンドオブライフケアの選択、療養と逝去場所の選択など、情報の何をどこまで共有するか、どこで何をどのように支援するのか、患者と家族を支える医療者の葛藤は計り知れないことがあります。ひとの健康に関する多様な場で多様な支援が求められるなか、その文脈のなかで、対象者と家族が最終的な意思決定に向けて折り合いをつけながら納得のいく決断をするために、結果のみならず、共有意思決定支援（Shared Decision-Making：SDM）というプロセスでの最善の支援を探求しています。ウィメンズヘルスや妊産婦のメンタルヘルスなど、日々の看護・助産実践や教育実践から生じた問題点を明らかにし、研究成果が実践に応用されることを目指した研究をしたいと思っています。



カナダでの Ottawa Patient Decision Aid Research Group Meeting

キーワード

- ・意思決定支援
- ・ウィメンズヘルス
- ・看護倫理
- ・臨床推論
- ・EOLC



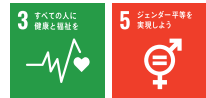
伊東 美佐江 教授

Ito Misae



Villanova University大学院修士課程(米国)修了(看護学修士)
山口大学大学院医学系研究科博士後期課程修了(医学博士)
山口大学医学部保健学科助手、同講師
川崎医療福祉大学医療福祉学部保健看護学科准教授、同教授
2018年より同教授となる。

女性のライフサイクル全般を支援する



助産師には周産期におけるケア・援助だけでなく、女性のライフサイクル全般への支援が求められており、女性とその家族に対する支援について極めて重要な役割を担っています。私は望まない妊娠・性感染症の予防、月経および月経周期症状に関する教育、育児支援、助産師教育などに関する研究に取り組んできました。家庭における性教育は小学校高学年で最も多く学年進行に伴い減少していたこと、父親による性教育は非常に少ないことを明らかにしました。また、コンドームの正しい管理・使用方法について理解していない大学生が多いこと、緊急避妊薬および低用量経口避妊薬について理解している大学生は非常に少なく、低用量経口避妊薬の副作用に対する不安から使用に否定的な者が多いことを明らかにしました。現在は、既婚者の家族計画に関する研究、10代への低用量経口避妊薬に関する教育について研究しています。

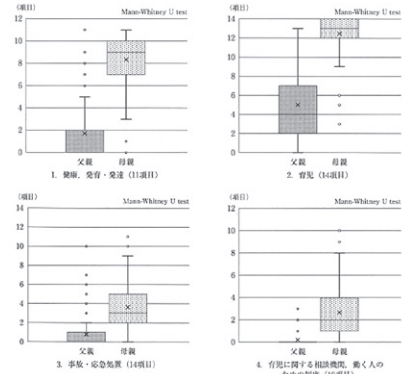


図 父親・母親に対する育児指導項目数の比較

キーワード

- ・望まない妊娠
- ・性感染症の予防
- ・月経および月経周期症状に関する教育
- ・育児支援
- ・助産師教育



亀崎 明子 准教授
Kamezaki Akiko

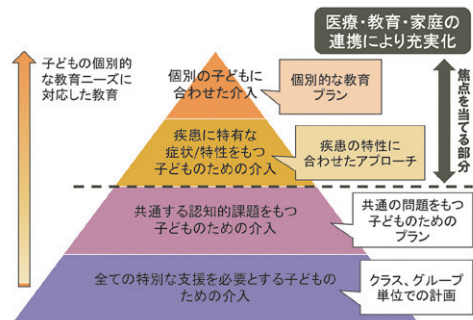


1997年熊本大学医療技術短期大学部看護学科卒業、2015年山口大学大学院医学系研究科博士後期課程修了(保健学博士)、2008年山口大学大学院医学系研究科保健学系学域母子看護学講座助教、山口大学大学院医学系研究科保健学専攻同講師を経て、2017年より准教授となる。

希少染色体疾患児のための 遺伝学的知見を取り入れた学校生活支援



染色体構造異常症(特に、1q部分重複症候群、5p-症候群、Jacobsen症候群、Prader-Willi症候群)のあるお子さんに焦点を当て、疾患に関する遺伝学的な知見、疾患の特性を踏まえつつ、その子らしさを尊重した学校生活実現のための医療(看護)・教育・家庭の連携をテーマに、研究に取り組んでいます。近年の遺伝学的検査技術の進歩により、これまでは「原因不明の先天異常」等の診断しかつけないことができなかったお子さん達も、詳細な染色体の欠失/重複部位や、それを基にした診断がつけられるようになりつつあります。診断がついても、その疾患の特性や自然歴は十分に知られておらず、学校や職場において、コミュニケーション上のトラブルや、怠惰であると受け取られたりするケースもあることが知られています。そのような中から、学校生活において、疾患の特性とお子さんの個性も含めた「その子らしさ」が尊重された学校生活実現のための支援体制を確立したいと考えています。



本研究の位置づけイメージ (Reilly, 2012 より改変)

キーワード

- ・遺伝看護
- ・染色体異常
- ・希少疾患
- ・難病
- ・就学



沓脱 小枝子 講師
Kutsunugi Saeko



2005年 山口大学医学部保健学科 看護学専攻卒業
2011年 山口大学大学院医学系研究科保健学専攻博士前期課程修了
2021年 琉球大学大学院保健学研究科博士後期課程修了
山口大学大学院医学系研究科保健学専攻 母子看護学講座 助手、助教を経て現在に至る。専門分野は小児看護学、遺伝看護学。

医学・医療の立場から高齢者、特に認知症を考える



私は2017年度に、山口県周防大島町の委託を受けて周防大島町在住の65歳以上の住民145名に対して健康状態、身体機能、認知機能、栄養状態に関する調査を行い、80歳以上の女性、独居高齢者は低栄養になりやすいことなどを明らかにした。そして、令和2～4年度科学研究費補助金（基盤研究C）「認知症発症に関連する因子の検討—特に栄養状態と体組成の観点から—」による研究において、タッチパネル式物忘れ相談プログラムMP-1100を用いて高齢者の認知機能を検討したところ、65歳から74歳までの対象者120名のうち9名（7.5%）がアルツハイマー型認知症疑いであり、さらには図形認識問題において不正解者が52名（43.3%）と極めて多いことを見出した。今後は図形認識に着目して、より簡便なスクリーニング検査を導入することにより早期の認知機能低下を検出し、認知症への早期介入や予防・進行防止につなげたい。



タッチパネル式物忘れ相談プログラムMP-1100（日本光電社製）を用いて、認知症スクリーニング検査を実施している様子

キーワード

- ・認知症
- ・アルツハイマー型認知症
- ・認知機能低下
- ・認知症スクリーニング検査
- ・早期発見



野垣 宏 教授

Nogaki Hiroshi



1983年 神戸大学医学部医学科卒業
1989年 山口大学医学部附属病院神経内科助手
1993年 山口大学医学部神経内科学講座講師
2004年 山口大学医学部保健学科教授
2018年 山口大学医学部保健学科長、副学部長、山口大学評議員

よりよい高齢者ケアを目指して —看護研究は看護改善研究だ—



若き日の臨床経験から、高齢者のニーズを満たすためには研究活動が不可欠であると確信し、以来、「看護研究は看護改善研究です」と言い続けて30年が経ちました。テーマは、高齢者の睡眠・覚醒パターンの実態解明とアクティビティケアによる改善効果、認知症高齢者の行動・心理症状 Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia : BPSDの緩和などです。音楽、ゲーム、化粧などを手法とするアクティビティケアは臨床現場で継続的に実施され、「堤さんの置き土産」と言われたり「論文を読みました。うちの施設でもやってみます」というお手紙をいただいたりします。近年は「快」をコンセプトに、アクティビティや映像によって心地よい刺激を提供し、効果を検討しています。例えば写真の調査では、健康維持を考えて造形された庭園を散歩することで自律神経バランスが整うことを「疲労・ストレス測定システム」を使って明らかにしました。



2018年山口ゆめ花博で「健康の庭」を散歩した高齢者の心身反応を調査した。散歩後は自律神経バランスがとれた状態に近づいていた。

キーワード

- ・高齢者
- ・アクティビティケア
- ・睡眠・覚醒パターン
- ・認知症



堤 雅恵 教授

Tsutsumi Masae



1982年 熊本大学教育学部特別教科(看護)教員養成課程卒業 同年、山口大学医学部附属病院第3内科病棟の看護師となり3年、その後特別許可老人病院に5年4ヶ月勤務した後に、1990年から教育・研究機関に勤務。2007年 広島大学大学院保健学研究科博士後期課程修了(保健学博士)。2008年 山口大学大学院医学系研究科保健学専攻 地域・老年看護学講座 教授

エイジング・イン・プレイス

～住み慣れた地域で、その人らしく、最期まで～



高齢になり病気を患っても、しょうがいを負って不自由になっても、認知症になっても、誰もが安心して療養し、暮らすことのできる社会を目指す研究活動に取り組んでいる。私達の研究チームは、エイジング・イン・プレイスを「今いる場所で最期まで」と捉え、認知症対応型共同生活介護（グループホーム）や小規模多機能型居宅介護などの、医療機関とは異なる小さな事業所で、最期まで暮らすことを実現したいと考えている。「最期まで暮らす」ためには、介護事業所で看取りの実践が求められ、看取りの実現にはどのような要素が関連するのかを調査し、教育プログラムの開発・実践・評価に取り組んでいる。「緩和ケアを含む質の高い看取りの実践」「看取り満足度」「職務満足度」「オンラインによる実施」に焦点を当て、介護老人保健施設、グループホーム協議会の協力を得て看取り教育プログラムを実践した。今後もフィールドを拡大し、プログラムの精錬を目指す。



本研究では、看取り満足度や職務満足度を高めるオンラインでの教育プログラムを開発し、地域ベースの看取り支援体制を構築する。

キーワード

- ・エイジング・イン・プレイス
- ・地域密着型サービス
- ・看取り
- ・教育研修プログラム
- ・フォーカス グループ ディスカッション



永田 千鶴 教授

Nagata Chizuru



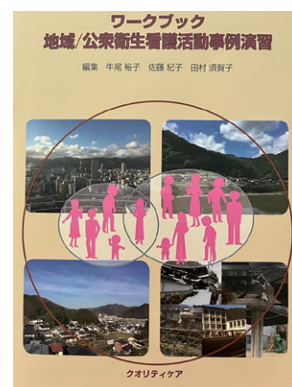
神経内科病棟看護師、医療法人堀尾会保健師、訪問看護ステーション訪問看護師（12年間の臨床経験）を経て、大学教育の場に入り、2014年より本学の地域・老年看護学講座教授となる。座右の銘「志あるところに道はある」

「正解のない問題」に挑戦する力を育てる

ーメタ認知に着目し公衆衛生看護の思考を深める対話法ー



公衆衛生看護は、保健師の実践や教育を専門とする領域です。先行き不透明で将来予測が困難なポストコロナの時代において保健師は、既存の解の当てはめでは解決しない「正解のない問題」に取り組む力が、より一層求められるようになります。メタ認知とは自身の認知を異なる次元から俯瞰する認知で、自律的学習や熟達化の鍵であり、「対話」から導かれるとされています。看護実践能力の修得には、講義で学んだ知識・技術を、実際の事例や状況に適用する演習・実習教育が重要です。無数の変数で構成される事例や状況で学ぶ際、教員や実習指導者のフィードバック（対話）が重要となります。これまでの研究では、公衆衛生看護の学びを創り出す事例を用いた演習用教材の開発に取り組んできました。この研究では、教材を使って公衆衛生看護の思考を深める対話の方法論を、メタ認知の概念をもとに探究します。



研究成果をもとにした公衆衛生看護演習ワークブック

キーワード

- ・公衆衛生看護
- ・保健師
- ・人材育成
- ・メタ認知



牛尾 裕子 教授

Ushio Yuko



1990年千葉大学看護学部卒業
1992年千葉大学大学院看護学研究科で修士学位（看護学）取得、
2000年同大学同研究科で博士学位（看護学）取得
兵庫県保健師（1992～1995）、兵庫県立看護大学助手、千葉大学看護学部助手・講師、兵庫県立大学看護学部准教授を経て、2021年より現職

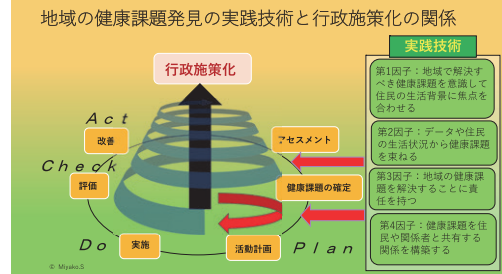
公衆衛生看護技術の可視化を目指して

～個別課題から地域課題への視点の展開技術を日常業務の中で向上させるモデル開発～

3 すべての人に健康と福祉を



公衆衛生看護の担い手である保健師は、地域の健康度を高めるために個別事例だけでなく地域を対象とした予防活動を行っています。多様化複雑化する健康課題へ対応するために、潜在ニーズも含めて健康問題を把握し、地域診断によって地域の健康課題を明確化することが重要です。地域診断に用いられる質的データは、住民の声など保健師の日常業務の中で出会う個別事例への対応を通じて収集され、共通する課題の中から地域の健康課題を見出すことができます。しかし、この個別課題から地域課題へと視点を広げる展開技術は経験知で語られており、技術を言語化し向上させるための方法論を明らかにすることが課題です。公衆衛生看護技術を可視化することで、現任保健師の技術が向上し、行政施策化など地域の健康課題解決を促進させることが期待されます。これまでの行政保健師の経験を活かして研究と実践が結びつく実装研究に取り組んでいます。



「市町村保健師活動における地域の健康課題発見の実践技術」
地域の健康課題発見の実践技術と行政施策化の関係

キーワード

- ・公衆衛生看護
- ・地域看護
- ・地域アセスメント
- ・保健師
- ・現任教育



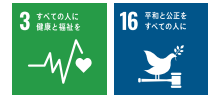
斎藤 美矢子 講師
Saitou Miyako



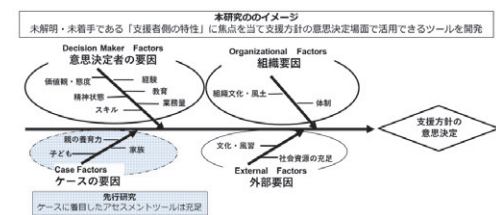
2018年 山口大学大学院医学系研究科保健学専攻博士前期課程卒業
1985年4月～2019年6月 宇部市役所保健師
2019年7月～山口大学大学院医学系研究科 講師
WEBサイト：地域看護学分野HP
<http://publichealthnursing.med.yamaguchi-u.ac.jp/>

地域・老年看護学

子どもネグレクトのハイリスク家族への支援に関する研究



わが国において、児童虐待の相談対応件数は増加の一途を辿っていますが、多くが保護者からの分離はなく、在宅における見守り対象となっています。特に虐待全体のうち40%以上を占めるネグレクトは、他の虐待に比べ生命の危険性も低く見積られる傾向にあります。子どもネグレクト家庭の背景にあるリスクの多様性や重複により、個別性の高い支援が求められています。しかし、支援者は長期化する支援において困難さを抱え、海外では、支援者によって判断が異なることや、ケース以外の要因による影響が課題とされています。子どもネグレクトハイリスク家庭へのケアモデルの開発の一環として、現在は支援方針の適正化や改善につなげることを目指し、支援方針の意思決定場面で活用できるツールの開発に取り組んでいます。



キーワード

- ・母子保健
- ・児童虐待予防
- ・子どもネグレクト
- ・公衆衛生看護学



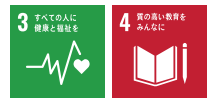
緒方 彩乃 講師
Ogata Ayano



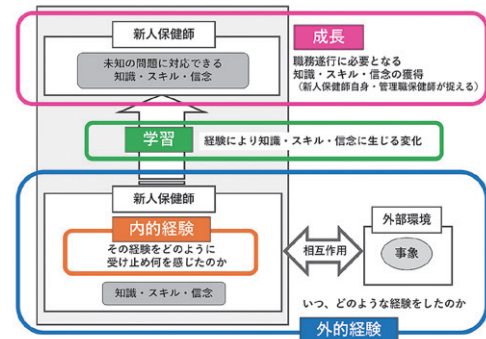
2015年山口大学助手
2018年山口大学大学院医学系研究科保健学専攻博士前期課程卒業
2018年山口大学助教
2020年大分県立看護科学大学助教を経て、2022年より山口大学講師

看護学領域

COVID-19 世界的流行による健康危機において 新人保健師の成長につながった経験



2020年1月に日本で初めて COVID-19 患者発生が報告されて以降、保健所の保健師は、積極的疫学調査、入院調整、健康観察、施設のクラスター対応など、感染拡大を食い止める業務を一手に担っています。COVID-19 対応は大規模かつ長期的となり、保健師の心身のダメージが蓄積されています。私は、COVID-19 第1波流行の際に、保健所応援に従事しました。まだ体制整備が進まない中、入職して間もないにもかかわらず、新人保健師は現場の即戦力として鳴りやまない相談電話に対応し続けていました。この経験が研究の動機になります。危機的な状況に迫られ、自律的に役割を果たさなければいけない経験をしたからこそ、成長できたことがあると考えました。現在、COVID-19 流行下の新人保健師の成長と、その成長につながった経験を明らかにするため研究に取り組んでいます。これからの時代の保健師人材育成に貢献していきたいと考えております。



本研究の枠組み（新人保健師の経験と成長）

キーワード

- ・公衆衛生看護
- ・保健師
- ・保健所
- ・人材育成
- ・現任教育



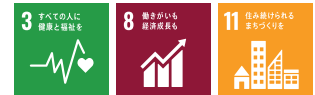
村上 祐里香 助教

Murakami Yurika

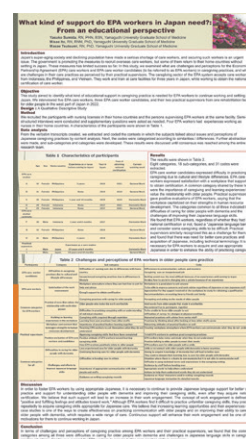
- 2014年 山口大学医学部保健学科看護学専攻 卒業
山口県 保健師
- 2020年 山口大学大学院医学系研究科 保健学専攻
地域・老年看護学講座助手



日本の高齢化を支える介護人材のこれから —介護人材不足に対して何ができるか—



高齢化は日本だけでなく、先進諸国を中心に世界的にも進行しています。高齢化先進国である日本は、介護保険法などの高齢者を支える制度が世界から注目されていますが、国内の実状としては、13年連続の人口減少と超高齢化が同時に進み、介護を担う人材の不足が深刻な問題となっています。そのような中、高齢者ケアおよび在宅ケアを専門領域としている私は、外国人介護人材に注目し、経済連携協定 (Economic Partnership Agreement: EPA) に基づく介護福祉士候補者および資格を取得した介護福祉士の資質の向上と就労の継続に関する研究に取り組んでいます。研究者としてまだ出発したばかりではありますが、今後は専門分野の研究を進めるとともに、高齢者と子どもが共存できる社会づくりなど関心のある分野においてさらなる研究をしていきたいと考えております。



The 11th Hong Kong International Nursing Forum (2021) で日本の介護人材不足やEPA介護人材の現状等を、2022年にEPA介護人材への教育的支援の必要性について発表しました。

キーワード

- ・EPA 介護福祉士
- ・EPA 介護福祉士候補者
- ・高齢者介護
- ・介護人材不足
- ・教育的支援



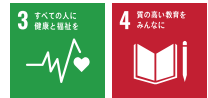
住田 靖子 助教

Sumida Yasuko

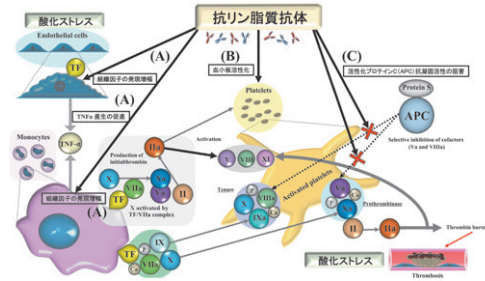
- 2012年 山口大学医学部保健学科卒業
- 2012年～2021年 山口大学医学部附属病院 看護師
- 2021年～ 山口大学大学院医学系研究科保健学専攻
地域・老年看護学講座助手



抗リン脂質抗体症候群の検査診断法の確立と病態発症機序の解明に関する研究



抗リン脂質抗体症候群（APS）は、リン脂質に関連する自己抗体である抗リン脂質抗体の出現と、それに伴う多彩な血栓性合併症を特徴とする自己免疫疾患であります。我々の研究室は日本抗リン脂質抗体部会に加盟し、日本におけるAPS検査の標準化を進めると共に独自でELISAや凝固アッセイを開発し、新たなAPS検査診断法の確立を目指しています。さらに、我々が提唱したAPSの病態発症機序（仮説）である“Cell-mediated coagulation induction”に基づき、患者血漿より単離・精製した各種IgG抗体を用いて、独自に開発したヒト血管内皮細胞・単核球・血小板の共培養実験系により、分子レベルで抗リン脂質抗体の血栓形成機序（血小板活性化作用、凝固制御機構阻害作用、単球・好中球・血管内皮細胞における組織因子発現・接着分子発現・NETs形成・サイトカイン産生など）の解明に取り組んでいます。



新たなAPS病態発症機序（仮説）
“Cell-mediated coagulation induction”

キーワード

- ・血栓止血学
- ・抗リン脂質抗体症候群
- ・全身性エリテマトーデス
- ・酸化ストレス
- ・ループスアンチコアグラント

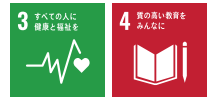


野島 順三 教授
Nojima Junzo



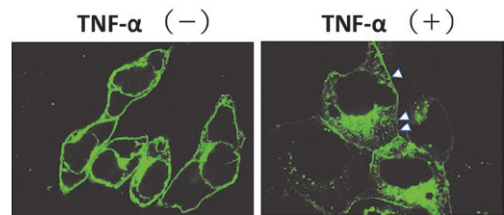
2003年3月 大阪大学大学院医学系研究科（博士後期課程）修了。
博士の学位取得（大阪大学・第17716号）。
2008年4月 山口大学大学院医学系研究科 生体情報検査学 教授。
大阪大学大学院医学系研究科 招聘教授（兼務）。
2019年4月 山口大学大学院医学系研究科 生体情報検査学領域長 教授

①脳血液関門を制御する因子の検討 ②細胞診教育における遠隔教育の試み



① 脳腫瘍が化学療法や放射線療法に対して抵抗性を示すのは、腫瘍が脳血液関門という特殊な環境下に存在することによる。また糖尿病においては、血液網膜関門の破綻が、糖尿病性網膜症等の進行に関与していると考えられ、これらの血液関門を維持・調節する因子を同定し、それを制御することで、これらの病態をコントロールすることが考えられる。現在注目しているのは、タイト結合構成タンパクである claudin-5で、炎症刺激等で膜局在が減少することを手掛かりとして研究を行っている。

② 本学には、在学中に細胞診の資格を取得できる細胞診コースがあるが、今日のCovid19禍においては、実際の標本を使った実習が困難な状態である。組織標本と違って、細胞診標本で細胞像のZ軸での変化の観察も重要であり、通常の顕微鏡写真のみでの学習効果には限りがある。現在これを、解決するためのハード、ソフトの開発を目指している。



内皮細胞における細胞膜 claudin-5 は TNF-α 刺激によって膜から細胞質に移動する。

キーワード

- ・血液網膜関門
- ・膠芽腫
- ・癌幹細胞
- ・アミロイドーシス
- ・細胞検査士



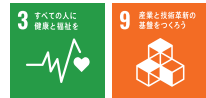
河野 裕夫 教授
Kawano Hiro



医学博士、病理専門医、細胞診専門医
山口大学医学部保健学科基礎検査学講座・教授
細胞診コース指導教官

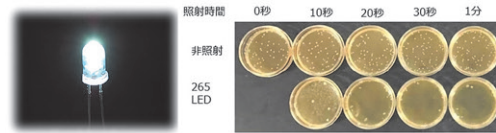
消化器がんに関連する微生物を研究

～胃がんを起こすピロリ菌や大腸がんを起こす歯周病菌を制す～



消化器がんの発生には微生物が関与しています。胃がんにはピロリ菌が関与しており、ピロリ菌感染者の減少によって、胃がんは減りました。肝臓がんには肝炎ウイルスが関与しており、肝炎ウイルス対策により肝臓がんも減っています。我々の研究室では胃がんを起こすEBウイルスについて研究をしています。EBウイルスが胃粘膜に感染するとがん化することや胃がんを発生させる機序、EBウイルス関連胃がんに特異的な治療法の開発に取り組んできました。現在は大腸がんが非常に増えてきています。そして、歯周病菌であるフソバクテリウム・ヌクレアタムという細菌が大腸がんの発生に関与していることが分かってきました。歯周ポケットにバイオフィルムを形成して住み着いている歯周病菌に対する治療は十分に開発されていません。歯周病菌に対する光治療法を開発し、大腸がんを予防するだけでなく、多くの患者のQOLを改善する治療法の開発を進めています。

歯周病菌を光で治療し健康になる！



265nmの深紫外LED光を照射すると歯周病菌が1分で殺菌できます。

キーワード

- ・胃癌
- ・大腸癌
- ・ピロリ菌
- ・EBウイルス
- ・歯周病菌

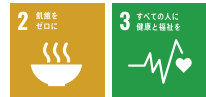


西川 潤 教授
Nishikawa Jun

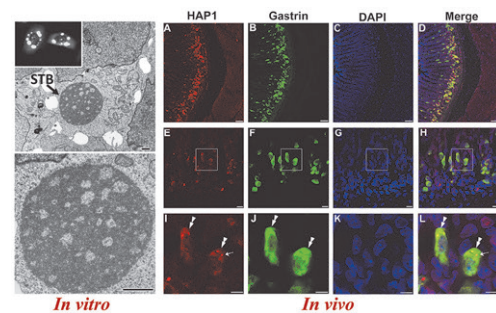


1993年 大分医科大学医学部卒業。1995-1999年 山口大学大学院医学系研究科。2001-2003年 スウェーデン王立カロリンスカ研究所。2005年より、山口大学第一内科 助教、講師、山口大学医学部附属病院光学衣料診療部 准教授を経て、山口大学大学院医学系研究科 基礎検査学講座 教授となる。

消化管における細胞内構造体“STB/HAP1”の病態・生理機能解明



私たちの体を構成している細胞内には、様々なオルガネラといわれる構造が存在し、ダイバーシティ（多様性）が保たれています。私たちの研究グループでは、正常脳内に存在する構造体“stigmoid body (STB)”を電子顕微鏡を用いて発見・命名しました。STBの電子顕微鏡像は、アルツハイマー病やパーキンソン病でみられる病的な凝集体やアグレソームとは全く異なります。STBには、HAP1 (huntingtin associated protein 1) が局在し、視床下部、辺縁系を中心に分布していることやSTB/HAP1が神経変性疾患などによる細胞死から神経細胞を保護する作用を持つことを世界に先駆けて報告してきました（医学系研究科神経解剖学講座との共同研究による）。一方、脳内だけでなく、胃などの消化管をはじめとする末梢臓器においてもSTB/HAP1が存在することを明らかにし、消化管などの疾患におけるSTB/HAP1の病態生理機能についても検討し始めています。今後、さらなるSTBの機能について探求し、将来、治療に応用できるような基盤研究を進めています。



左図は、培養細胞においてHAP1 cDNAをトランスフェクション後、誘導されたSTB（矢印）。右図は、ラット胃幽門部におけるSTB/HAP1の分布。

キーワード

- ・HAP1 (Huntingtin associated protein 1)
- ・stigmoid body (STB)
- ・脳
- ・消化管
- ・電子顕微鏡



柳井 章江 准教授
Yanai Akie



宮崎医科大学 法医学教室 助手
山口大学大学院医学系研究科 神経解剖学講座 助教、講師を経て2018年10月より山口大学大学院医学系研究科 基礎検査学講座 准教授

環境中の薬剤耐性菌の現状と 耐性遺伝子の伝播・消滅メカニズムの解明

世界的脅威の一つである薬剤耐性菌問題は、今や公衆衛生上の深刻な国際問題です。WHOは“ヒトの健康を守るためには、動物や環境にも目を配る必要がある”という総合的な健全性を表現する“One Health”という基本概念を提唱し、世界各国に対策を要請しています。薬剤耐性菌は院内だけの問題ではなく、抗菌薬を使う農・畜・水産業界・家庭排水が発生起源となっており、そこから耐性菌が環境中に排出拡散されることから現状はより深刻化しています。本研究室では、環境中での薬剤耐性菌の現状を把握するとともに、耐性遺伝子の伝播のメカニズムを、特に薬剤耐性遺伝子伝播が活発とされるバイオフィルム内にて、分子生物学的手法を用い研究を進めています。さらに微生物生態学的観点から、薬剤耐性菌を減少させる方法として、環境中に生息する微生物を用い捕食・消化させることも試みています。また、One Healthの観点から、人畜共通感染症の主な媒介生物「蚊」に注目し、環境DNAの手法を用いて、水域における媒介生物による感染拡大予測モデルの構築も試みています。



右) 薬剤ディスク試験 阻止円 (一) はその薬剤に対して耐性を示す
左) 細菌を捕食した繊毛虫 青は DAPI 染色した細菌

キーワード

- ・微生物生態学
- ・バイオフィルム
- ・薬剤耐性
- ・環境 DNA
- ・メタン酸化細菌

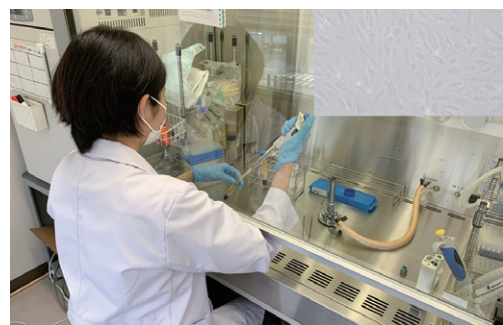
小林 由紀 准教授
Kobayashi Yuki



1985年山口大学医療技術短期大学部衛生技術学科卒業
2003年神戸大学農学部環境制御学科卒業
2005年京都大学大学院理学系研究科生物科学専攻修士課程修了
2009年京都大学大学院理学系研究科生物科学専攻博士課程修了
京都大学、Academia Sinica(台湾)等で研究員を経て2016年より本学に着任

抗リン脂質抗体と酸化ストレスによる 向血栓性作用の解明

抗リン脂質抗体症候群 (antiphospholipid syndrome: APS) は血中に抗リン脂質抗体が出現し、動脈血栓症や静脈血栓症、習慣流産などを繰り返し発症する自己免疫疾患です。抗リン脂質抗体とはリン脂質に関連する自己抗体の総称であり、抗体の種類によって血栓症の発症リスクが異なることが知られています。APSでは何度も血栓症を起こすことが大きな問題ですが、その詳細なメカニズムは解明されていません。私たちはAPS患者さんの血中が酸化ストレスの高い状態であることを明らかにしました。そこで、抗リン脂質抗体と高度な酸化ストレスが、血管内に血栓のできやすい環境をもたらす可能性に着目し、血管内の種々の細胞に対する抗リン脂質抗体と酸化ストレスの作用を検証しています。抗リン脂質抗体の種類別に様々な検討を行い、APSの病態解明の一端を担いたいと考えています。



細胞培養室で血液から白血球を分離しているところです。ここで血管内皮細胞(写真右上)や白血球を対象に実験をしています。

キーワード

- ・抗リン脂質抗体症候群
- ・酸化ストレス
- ・血栓症
- ・自己抗体



本木 由香里 講師
Motoki Yukari



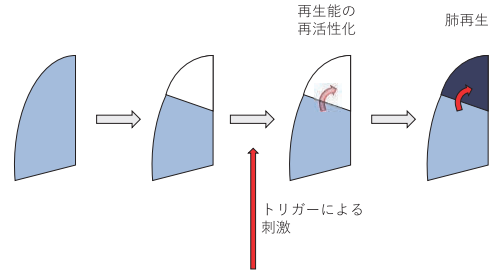
2009年 山口大学医学部保健学科卒業
2011年 山口大学大学院医学系研究科保健学専攻博士前期課程修了
2014年 山口大学大学院医学系研究科保健学専攻博士後期課程修了
2013年より山口大学助教、2021年より同講師となる。

肺を造る

～ヒト成体肺組織における再生戦略についての研究～



本研究は、成体肺、特に肺胞に潜在する再生能力の再活性化に焦点を当て、肺再生療法を確立することを目的としている。肺は構造的、機能的に非常に複雑な臓器であり、近年研究が進んでいるiPS細胞などを用いた再生療法は困難であると考えられる。そこで、代償性肺再生と称される片肺を切除したのちに機能を補うように残存肺が肥大する現象に着目し、そこに、発生段階における肺胞隔壁増生(septation)を伴う肺胞形成能が成体においても潜在している可能性を考えた。マウスを用いた我々の以前の研究により、代償性肺再生が起こる際には肺胞道が拡張したのちに肺胞新生が起こることが明らかになった。よって、肺胞道拡張の際の物理的過伸展刺激に着目し、マウス肺胞上皮細胞MLE12を用いた伸展培養システムを構築し検討を行ってきた。現在は、人為的に肺胞新生を生じさせるトリガーと成り得る因子の探索を試みている。(医学系研究科病理形態学講座との共同研究)



「成体肺に潜在する再生能の再活性化」のシエマ。本研究は、このトリガーと成り得る因子の探索を主たる目的としている。

キーワード

- ・肺再生
- ・肺胞上皮細胞
- ・肺胞新生
- ・肺胞隔壁増生



清水 勇輝 助教
Shimizu Yuki

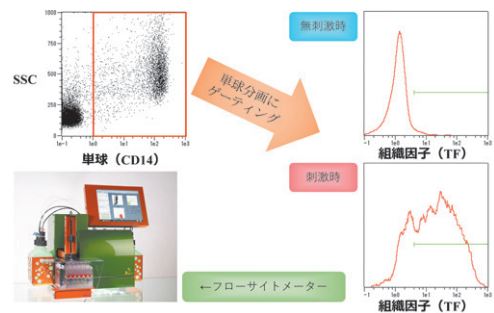


2007年 山口大学医学部保健学科検査技術科学専攻卒業
2009年 山口大学大学院医学系研究科保健学専攻生体情報検査学分野博士前期課程修了
和歌山県立医科大学附属病院中央検査部における勤務を経て、2016年より現職となる。

抗リン脂質抗体による細胞依存性凝固反応の包括的検討



抗リン脂質抗体症候群 (APS) は、抗リン脂質抗体の出現と、それに伴う極めて多彩な合併症 (脳梗塞・深部静脈血栓症・妊娠合併症等) を呈する自己免疫疾患です。APSの最大の特徴は、動脈・静脈を問わずに血栓塞栓症を繰り返して発症することですが、APSにおける血栓形成機序や、個々の抗リン脂質抗体が持つ血栓形成作用は、いまだ解明されていません。私たちはAPSにおける血栓形成機序を解明する目的で、抗リン脂質抗体による免疫担当細胞の活性化作用や、抗リン脂質抗体を認識する細胞表面レセプターの探索に加え、抗体検出の為に免疫アッセイの標準化を進めており、抗リン脂質抗体による細胞依存性凝固反応を包括的に検討しています。加えて、妊娠合併症と関連のある抗リン脂質抗体の検討も多施設共同で行っています。



フローサイトメーターという機械を使って細胞(単球)表面の組織因子の発現を解析している例

キーワード

- ・抗リン脂質抗体症候群
- ・フローサイトメトリー解析
- ・免疫アッセイ
- ・血栓止血学



金重 里沙 助教
Kaneshige Risa

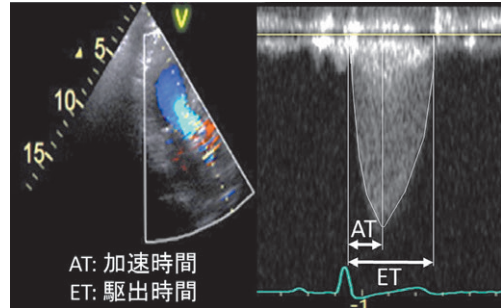


2016年 山口大学医学部保健学科卒業
2021年 山口大学大学院 医学系研究科 生体情報検査学 博士後期課程 修了
2019年より山口大学助教となる。

心臓超音波検査法の便利な使い方を求めて ～例えば時相計測からの大動脈弁狭窄症の評価～



心 エコー図検査、特に心機能評価・弁膜症評価に興味を持っています。この分野では、実際の臨床例に多く触れることが大切と考えています。大動脈弁狭窄症（AS）の診断には超音波検査である心エコー図検査法が必須ですが、画像描出が困難な症例については、心音・心機能時代からの知見で時相計測によって得られる、ASでの「左室駆出時間の延長」や「頸動脈波の開始からピークに至るまでの時間の延長」が応用できます。心エコー図検査法でこれらに相当する指標は左室から駆出される血流におけるAT（加速時間）とET（駆出時間）の比 AT/ET ですが、これは従来から、ASにおけるAS重症度と良い相関を示すことが知られており、その臨床応用を検討しています。これまでに大学院で学んだ方々は、ほとんどの方が附属病院での心エコー図検査のトレーニングを受けてきました。その後、引き続き心エコー図検査の経験を重ねて、超音波検査士の資格を取得した方もおられます。



図は大動脈弁血流の連続波ドプラ波形。ATとETの比AT/ETは、大動脈弁狭窄症（AS）の重症度と良好な相関を示すことが知られている。

キーワード

- ・心臓超音波検査 (心エコー図検査)
- ・心機能評価



田中 伸明 教授

Tanaka Nobuaki

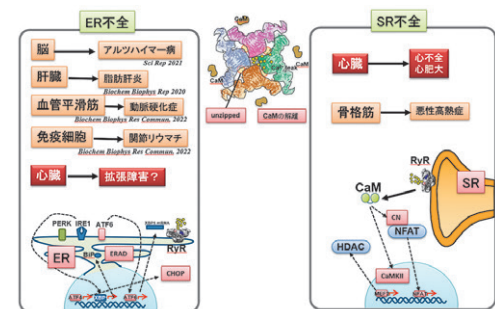


1983年 鹿児島大学医学部医学科卒業
1987年 山口大学大学院医学研究科博士課程修了
1987年 国立循環器病センター研究所循環動態機能部研究員
1999年 山口大学医学部附属病院副検査部長
2013年 山口大学大学院医学系研究科保健学専攻病態検査学講座

カルモジュリン制御で筋小胞体、小胞体ストレスを制御し、 様々な疾患の治療に貢献する



これまで一貫して心筋のCa²⁺放出チャネルであるリアノジン受容体にかかわる研究を行ってきました。最近特にリアノジン受容体の修飾蛋白であるカルモジュリンに焦点を当てています。カルモジュリンのリアノジン受容体からの解離は心筋細胞における細胞内Ca²⁺の増加と、CaMKIIの活性化を介して、心肥大のスイッチを入れます。そこで私はカルモジュリンを解離しにくいアミノ酸配列を組み込んだRyR2 V3599K KIマウスを作成しました。このマウスは不整脈耐性があるのみならず、TAC手術を行っても心肥大を起ささないという面白い特徴があります。最近このマウスでは抗アルツハイマー病効果や、脂肪肝炎を起こしにくいなど、興味深い治験が明らかになってきました。またこのV3599K KIマウスのRNAseq解析から新たな抗心肥大遺伝子としてHerpud1遺伝子を特定し、機能解析を行っています。



RyR機能異常を共通機序として、細胞内Ca²⁺制御異常はSRとERで生じ、異なる表現型の疾患となる。

キーワード

- ・リアノジン受容体
- ・心肥大
- ・カルモジュリン
- ・不整脈



山本 健 教授

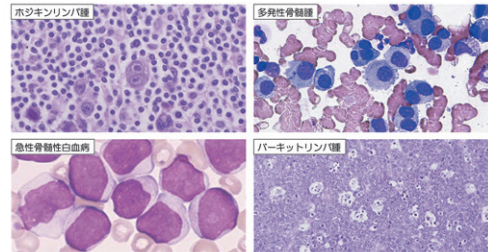
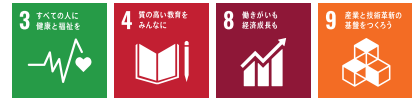
Yamamoto Takeshi



1989年(平成元年)山口大学医学部卒業
1993年(平成5年)山口大学大学院 医学系研究科修了
1998年(平成10年)Boston Biomedical Research Institute
2013年(平成25年)山口大学大学院医学系研究科器官病態内科学准教授
2016年(平成28年)山口大学大学院医学系研究科病態検査学教授

血液学から生命現象の包括的な理解を深め、医療に貢献する

超 高齢化社会を迎える現代社会において、悪性腫瘍（がん）との向き合い方は重要な課題です。これまで私は血液内科医として白血病・リンパ腫・骨髄腫等の血液腫瘍患者を数多く診療してきました。また近年の分子生物学的技術を駆使した腫瘍細胞の病態解析も行ってきました。血液腫瘍領域は、腫瘍細胞の異常なタンパクを標的とした治療（分子標的療法）や造血幹細胞移植やCAR-T療法等の免疫・細胞治療が進歩して急速に治療成績が向上してきています。そのような中で血液腫瘍の遺伝子診断技術の向上や新たな分子標的治療法の開発に取り組んでいます。その一つとして企業との共同研究として開発してきた骨髄増殖性腫瘍診断法は現在、臨床現場で遺伝子検査として行われています。さらに新たな血液腫瘍の診断法も開発中です。最近では、加齢に伴い増加する老化細胞が免疫・炎症に与える影響に興味を持ち研究に取り組んでいます。



キーワード

- ・骨髄増殖性腫瘍
- ・造血幹細胞
- ・細胞内シグナル伝達経路
- ・MEKK1



湯尻 俊昭 教授

Yujiri Toshiaki



1989年 山口大学医学部医学科卒業
 1992年 東京大学医科学研究所留学
 1996年 米国コロラド州National Jewish Medical and Research Center留学
 2000年 日本学術振興会特別研究員(PD)を経て山口大学助手・講師・准教授
 2018年 山口大学医学系研究科教授

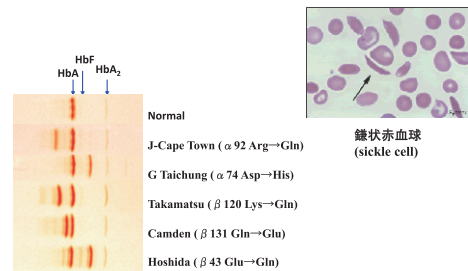
血色素異常症と溶血性疾患の病態解析

血 色素（ヘモグロビン, Hb）異常症は、質的異常による異常 Hb 症と量的異常によるサラセミアに大別できます。殆どが先天性の疾患で、Hb を構成しているグロビン鎖の遺伝子変異によるものが殆どです。日本人みられる Hb 異常症は殆どが軽症型ですが国際化に伴い種類・頻度など少しずつ変化が起っています。また、原因は不明ですが、同じ遺伝子変異でも臨床症状が異なる症例があります。広範囲に遺伝子が欠失していることが原因で起こるサラセミアも存在し、解析数が増えくると、同じような領域に欠失断端が存在していることから、遺伝子欠失のメカニズムが隠されているような気がします。研究し尽くされたように思われている Hb ですが、まだまだ解らないことが沢山あります。また、後天性の疾患で自己免疫性溶血性貧血に関する研究も行っています。赤血球結合 IgG の量以外に IgG の種類が溶血を引き起こす重要な鍵になっていると考えています。



異常ヘモグロビン症

ヘモグロビンを構成するグロビン蛋白質の異常



日本人にはまだ認められていない HbS 症の血液像と種々の異常ヘモグロビンの等電点電気泳動の図

キーワード

- ・サラセミア
- ・異常血色素症
- ・AIHA
- ・HbA1c
- ・Hybri-probe 法



山城 安啓 准教授

Yamashiro Yasuhiro

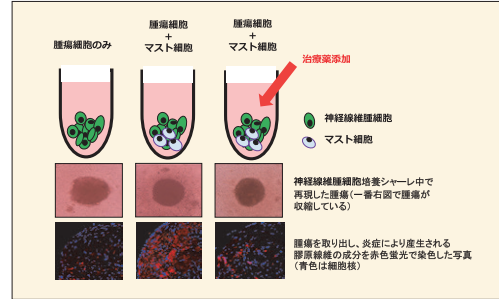


1980年 山口大学医学部附属臨床検査技師学校卒業。1980年～1992年 山口大学医学部附属病院検査部。1992年 山口大学医療技術短期大学部、山口大学医学部保健学科、山口大学大学院医学系研究科の助手・講師を経て准教授となる。1995年山口大学工学部知能システム工学科卒業。2001年 山口大学大学院医学研究科修了 博士(医学)

神経線維腫瘍増殖メカニズム解明と マスト細胞関連蛋白阻害による新規治療法の開発



レックリングハウゼン病は、思春期以降に神経線維腫が多発する国の難病に指定された遺伝性疾患です。次々と発生する腫瘍を外科的切除する以外の効果的な治療法は現在存在しないため、患者さんは日々大変辛い思いをしています。わたしは研究員をしていた前任地でこの病気の患者さんと知り合うきっかけを得たことで治療法の開発に貢献したいと考え、本腫瘍増殖メカニズムを解明する研究に取り組んでいます。本腫瘍内には腫瘍細胞とは別に、マスト細胞と呼ばれる強力な炎症を惹起する細胞（白血球の仲間）が多数存在しており、この炎症物質が腫瘍増殖に強く関与していると考えられています。わたしは長年、このマスト細胞の働きを抑制する治療薬の研究に携わっており、マスト細胞が放出する炎症性物質やアレルギーなどでよく知られるヒスタミンやトリプターゼ等の化学伝達物質の働きを抑制することで、本腫瘍の新たな治療方法の確立を目指しています。



培養細胞を用いた実験例

腫瘍細胞とマスト細胞を共培養することで膠原線維（赤色）は過剰に産生されるが、治療候補薬を添加することで減少していることが確認出来る。

キーワード

- ・神経線維腫
- ・レックリングハウゼン病
- ・マスト細胞（肥満細胞）
- ・iPS細胞
- ・腫瘍微小環境



山本 美佐 准教授
Yamamoto Misa



1986年3月山口大学 医療技術短期大学部 衛生技術学科卒（臨床検査技師）。1995年2月より久留米大学医学部形成外科学教室にて再生医療研究に取り組む。2004年3月に山口大学大学院 連合獣医学研究科 基礎獣医学専攻 単位取得退学。2004年4月より山口大学大学院 医学系研究科保健学系学域 に着任。2021年4月現在、同大学大学院医学系研究科保健学系学域 病態検査学分野 准教授（獣医学博士）

臨床検査技師だからこそ可能なリサーチ

～日常臨床におけるリサーチクエッションから新たな検査指標の開発を目指して～



日常臨床の中で「困ったな」、「どうしてなんだろう？」といったことに出会う経験は誰にもある。その着眼点は医療従事者の立場によっても異なるが、本研究室では超音波検査法や生理検査法に携わる臨床検査技師の立場から生じた疑問や問題点を主なりサーチクエッションとして抽出し、研究計画を練り問題解決を目標として研究を行っている。主な研究テーマ

1. 心臓模型や解剖法を用いた心臓超音波検査法の効果的教育法
2. 超音波検査法を用いた血管内皮機能評価法(FMD検査法)の標準化
3. 血管内皮機能からみた肝線維化評価法
4. 若年女性における血管内皮機能低下と卵巣機能低下の関連
5. リアルな自然や映像がもたらす自律神経機能への影響
6. 周産期うつ病早期診断のためのスクリーニング検査法の構築
7. 肝線維化評価における新指標の開発（人工知能を活用して）

*博士後期課程では臨床検査技師の実務経験を生かした研究テーマによる学位取得を応援します。



今年、宇部市の支援を受けて周産期うつ病の正診率向上を目指したスクリーニングアプリ開発のための研究をスタートさせました。

キーワード

- ・超音波検査法
- ・周産期うつ病
- ・肝線維化
- ・血管内皮機能
- ・人工知能 (AI)



末永 弘美 講師
Suenaga Hiromi

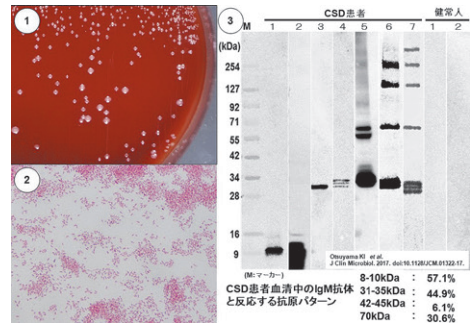


1986年 山口大学医療技術短期大学部 卒業
2003年 山口大学医学部保健学科助手
2007年 山口大学大学院医学系研究科助教
2011年 医学博士学位取得（山口大学）
2019年 山口大学大学院医学系研究科講師

人獣共通感染症である猫ひっかき病の検査キット およびネコに対するワクチン開発



猫ひっかき病 (CSD) は *Bartonella henselae* (①, ②) が原因菌である人獣共通感染症です。ネコとの接触 (ひっかき傷など) やネコノミを媒介として感染します。我々の研究室は CSD 検査が実施可能な施設として先進的感染症検査マップ (IDMAP) に唯一掲載されています。検査法は間接蛍光抗体法 (IFA 法) ですが、低感度が難点です。我々はウエスタンブロット解析により、*B. henselae* と CSD 患者血清 (IgM) が反応する 4 群の抗原パターンを検出しました (③)。現在これらの抗原を特定し、高感度な CSD 検査キットの開発を目指しています。さらに、日本におけるペットネコはおよそ 1000 万頭もいます。そのうち統計学的に約 100 万頭は *B. henselae* に感染していると推察されています。にもかかわらず感染予防対策は皆無です。そこで先に述べた抗原をネコワクチンとして開発し、ネコも飼い主も安心して暮らせる日常を目指します。



① チョコレート寒天培地に生える *B. henselae*
② *B. henselae* のグラム染色
③ CSD 患者血清使用 IgM-ウエスタンブロット網羅的解析

キーワード

- ・猫ひっかき病 (CSD)
- ・バルトネラヘンセラ (*Bartonella henselae*)
- ・ネコワクチン
- ・猫ひっかき病鑑別キット



大津山 賢一郎 講師
Otsuyama Ken-ichiro

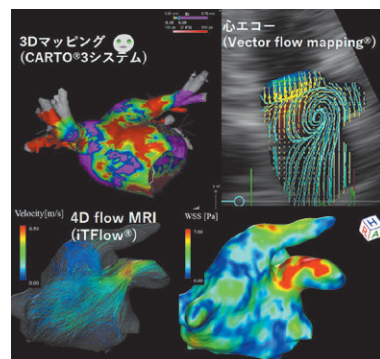


2006年 山口大学大学院医学系研究科応用工学系専攻修士 (工学)
2006年 山口大学大学院医学系研究科応用工学系専攻 (医学) 助教
2010年 山口大学大学院医学系研究科情報解析医学系専攻 助教
2015年 山口大学大学院医学系研究科医学教育学講座 特命助教
2022年 山口大学大学院医学系研究科保健学専攻 助教を経て講師。現在に至る。

血流で紐解く心房細動 ～多領域複合的アプローチによる心房細動治療戦略の構築～



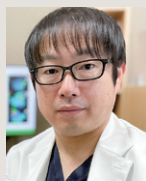
近年の不整脈疾患に対する検査法や治療法の進歩は著しいものがあります。その中で、不整脈治療に関する非侵襲的な検査法である各種心電図検査や心エコー・CT・MRI などの画像診断法と、侵襲的な電気生理学的検査や 3 次元マッピングから得られる心内電位情報を組み合わせ、複合的な視点で不整脈、特に心房細動についてその病態を捉える研究を行っています。心臓は絶えず一定のリズムで収縮と拡張を繰り返し全身に血液を供給しています。また、心腔内を流れる血液は、心臓の拍動による壁の動きや弁などの構造物により 3 次元的な渦流などを形成し、スムーズに血液が拍出されるようになっています。しかし、心房細動ではその心臓の拍動リズムがバラバラになることで、血液のうっ滞や拍出効率の低下をきたし、様々な病態を引き起こします。このような非効率的な血流を最新の血流解析技術で可視化し、そこから導き出せる流体力学的指標を基に、心房細動における血流エネルギー効率や、不整な血流が心筋筋の電気生理学的性状に及ぼす影響、またそれらが心房細動の様々な病態にどのように関連しているかを解明することにより、新たな検査法や治療法を開発すること目的としています。



様々な画像診断で捉えた左心房の例。
心内電位情報 (左上)、血流解析 (右上、下段)

キーワード

- ・不整脈
- ・心房細動
- ・心臓電気生理学的検査
- ・心エコー
- ・血流解析



小室 拓也 助教
Omuro Takuya

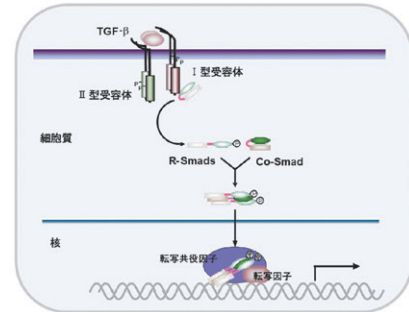


2005年 山口大学医学部保健学科検査技術科学専攻卒業
卒業後、倉敷中央病院にて臨床検査技師として循環器検査に従事
2014年 山口大学大学院医学系研究科保健学専攻修士 (修士 (保健学))
2015年～ 現職
2021年 山口大学大学院医学系研究科医学専攻修士 (博士 (医学))

シグナル伝達機構の解明と疾患との関わり



細胞内のシグナル伝達カスケードが細胞外シグナルをどのように受け取り、伝達し、それによって引き起こされる複雑な細胞応答をどのように調節しているかを理解することに重点を置いて研究をしています。中でもトランスフォーミング増殖因子β (TGF-β) スーパーファミリーのシグナル伝達に興味を持っています。TGF-βは骨形成因子 (BMP) やアクチビンなどと共に TGF-β スーパーファミリーを形成しており、細胞増殖、細胞死、分化、免疫調節など多様な生理作用に関与しています。TGF-βシグナル経路の異常は癌や他の様々な疾患にも関与しているため、TGF-βシグナル伝達経路の詳細な分子メカニズムの解明はそれら疾患の治療法の開発へと結びつく可能性があります。



TGF-βファミリーシグナル伝達機構 (Smad 経路)

キーワード

- ・シグナル伝達
- ・TGF-β
- ・Smad
- ・癌

稲光 正子 助教

Inamitsu Masako



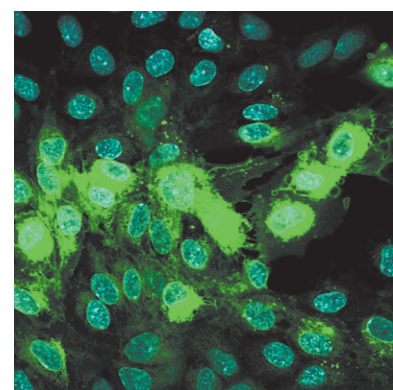
2005年 筑波大学大学院修士課程医科学研究科医科学専攻修了
2009年 筑波大学大学院博士課程人間総合科学研究科分子情報・生体統御医学専攻修了

英国MRC Clinical Sciences Centre 博士研究員、佐賀大学医学部博士研究員、福岡大学病院臨床検査部を経て2017年より現職

細胞同士の会話を聞いて体の状態を知る



細胞は、小さなカプセルを放出しています。カプセルの中には、DNA・RNA・タンパク質など様々な物質が含まれています。放出されたカプセルを他の細胞が受け取ると、カプセルに含まれる情報が伝達されます。情報を受け取った細胞は、その情報によって性質を変化させます。細胞から放出されるカプセルのことを、細胞外小胞(エクソソーム)と呼びます。エクソソームを用いたコミュニケーションは、がん・老化・妊娠など非常に多くの生命現象に関与しています。近年、エクソソームによる細胞間・臓器間コミュニケーションメカニズムが多く明らかにされてきました。しかし、どのようにエクソソームに情報を入れ、放出したエクソソームがどこへ行くのか、そして臓器機能の維持・疾患に関与しているかまだ分からないことばかりです。私たちは、発生・成長・老化、さらに疾患発症を通して、エクソソームがどのような役割を果たしているのか研究しています。



細胞がエクソソームを受け取っている。

キーワード

- ・細胞外小胞 (エクソソーム)
- ・がん
- ・老化
- ・骨格筋
- ・ゲノム



富永 直臣 助教

Tominaga Naoomi



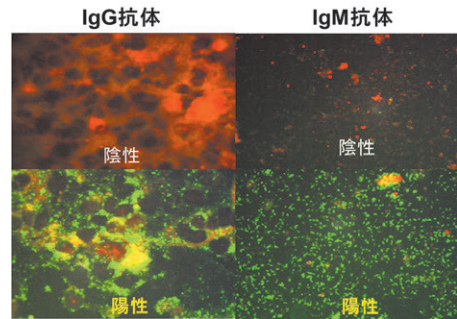
2016年 東京大学大学院医学系研究科 博士課程 修了
国立がん研究センター研究所 シニアリサーチフェロー
ハワイ大学がんセンター 研究員

2017年 マサチューセッツ工科大学 生物工学科 研究員
2021年 山口大学大学院 医学系研究科 助教

猫ひっかき病とその診断法に関する研究



猫ひっかき病 (Cat Scratch Disease:CSD) の病原体は *Bartonella henselae* バルトネラ菌である。本症は局所リンパ節腫脹と発熱を主訴とする定型例からリンパ節腫脹を認めない全身性の重症な非定型例 (不明熱、視神経網膜炎、肝・脾肉芽腫、急性脳症、心内膜炎など) までその臨床像は多彩である。温暖な地方ほどその発症例が多く、わが国においても西日本や九州地方に多い傾向がある。ネコとの接触のみならず、イヌやノミからも感染し、ノミは重要なベクターである。本菌は患者からの培養が困難なため、当研究室では患者の血清バルトネラ抗体価を測定する間接蛍光抗体法 (IFA-IgG/IgM) を独自に開発し、わが国のその実態を明らかにしてきた。また新たな血清診断法 (ELISA) を開発し、CSD 診断率の向上に努めている。現在では全国から CSD に関する相談や検査依頼が増加しており、わが国唯一の先進的感染症検査マップ (IDMAP) にも記載された CSD の検査可能な研究施設でもある。



間接蛍光抗体法による *B. henselae* 抗体価測定
陽性例では IgG/IgM いずれも強い蛍光を発する。
抗原は IgG : Vero 細胞との共培養菌、IgM : 単独培養菌を使用

キーワード

- ・猫ひっかき病
- ・間接蛍光抗体法
- ・*Bartonella henselae* 感染症
- ・バルトネラ菌



常岡 英弘 特命教授
Tsuneoka Hidehiro



1975年 山口大学医学部附属臨床検査技師学校 卒業
2004年 山口大学大学院医学研究科博士課程 (先端分子応用医科学) 終了
2006年 山口大学大学院医学系研究科保健学専攻教授
2016年 同上 生体情報検査学領域長
2018年 同上 特命教授

The MEDiterranean Islands Epidemiological Study – JAPAN



The original MEDIS study evaluated the relationships between socio-demographic, clinical, lifestyle (activities and dietary habits), and psychological characteristics, and the presence of various cardiovascular disease risk factors among older adults in the Mediterranean Islands with no history of chronic disease. The intention of this proposed collaboration for MEDIS-JAPAN is to compare the two places/regions (the Mediterranean Islands and Japan), both of which are countries with long-lived people. Information about the MEDIS can be found at <https://kines.rutgers.edu/medis/273-medis-study/868-about-medis>. The MEDIS-JAPAN project will follow the same recruitment protocol as in the MEDIS study. A group of health scientists (epidemiologists, physicians, nurses, and nutritional scientists) will collect the required information using a quantitative questionnaire, and adopting MEDIS standard procedures. Taking into account the aforementioned and based on a non-probability sampling scheme, the intention is to enroll 1,000 older males and females aged 65 or above (500 of each gender and stratified according to age and sex categories) from Japan to take part in the MEDIS-JAPAN project. The Principal Investigator of MEDIS-Japan is Prof. Demosthenes Panagiotakos, Professor in Biostatistics, Research Methods, and Epidemiology at the Harokopio University in Athens, Greece. Claudia Lai is the co-investigator/coordinator for the Japan team. This is just the beginning of this collaborative venture. Interested parties are welcome to join this international collaboration.



キーワード

- ・Diet
- ・Longevity
- ・Epidemiology
- ・Aged
- ・Health



Claudia Kam Yuk LAI 特命教授



Claudia Lai, PhD, RN, FHKCERN, FHKCGN, FAAN, is a nurse and a gerontologist. She started working as a professor (Special Mission) at Yamaguchi University in June 2022. She has two main research programs – the care of people with dementia and their families, and the care of frail older people. Presently, she is the editor-in-chief of the journal of Nursing & Health Sciences published by the Society of Nursing & Health Sciences under the auspices of Yamaguchi University.

ライフサイクルを通じた臓器間ネットワークの 統合的理解研究推進体



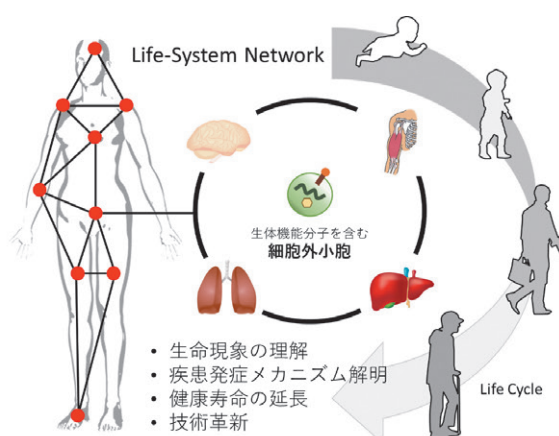
テーマ

異分野統合による生命システムネットワークと 疾患発症メカニズムを理解する

代表者 富永 直臣 助教（大学院医学系研究科）

研究推進体の活動

超高齢社会において健康寿命の延長は重要な課題となっています。老化をはじめ様々な疾患を克服し、全ての人々が健康で幸福な人生を享受することが一つの目標です。生命は、生まれて成長し老い、そして終わりを迎えます。どのような生命にもライフサイクルがあり、生命はその時々で変化しながら環境に対応しています。この過程でDNA障害やシグナル伝達異常が蓄積し、機能不全を引き起こすことが老化の一つの原因と考えられています。体内では、様々な細胞・臓器が連携を取りながら生命を維持していますが、成長



－老化過程でどのような連携を行っているのでしょうか。このような連携を理解するには、異分野統合による総合的理解が求められます。実は、細胞は細胞外小胞（エクソソームとも呼ばれている）という100nm程度の小さなカプセルを常に放出しています。この細胞外小胞には様々な機能性分子が含まれており、細胞から細胞へ受け渡されています。つまり細胞や臓器は、細胞外小胞を使いコミュニケーションを行っているのです。細胞外小胞は、様々な生命現象・さらには疾患発症に重要な役割を果たしていることが徐々に明らかになってきています。さらに、細胞外小胞は治療にも応用できることが大きく期待されています。様々なコミュニケーション因子に加え、細胞外小胞による臓器間ネットワークを理解することが、生命現象のみならず老化、疾患発症メカニズムの理解につながります。そしてこの理解が、課題解決の重要な礎となると期待しています。本研究推進体では、医学系研究科、共同獣医学部、工学系研究科の第一線で活躍している研究者が集まり、「細胞外小胞（エクソソーム）」を中心に成長－老化過程と疾患に至るまでの生命現象全体の統合的な理解と技術開発を目指しています。

推進体メンバー（順不同）

富永 直臣（代表者） 大学院医学系研究科・保健学専攻・病態検査学講座・助教	太田 康晴 大学院医学系研究科・病態制御内科学講座・准教授
濱野 公一 大学院医学系研究科・器官病態外科学講座・教授	中邑 幸伸 大学院医学系研究科・病態制御内科学講座・講師
上野 耕司 医学部附属病院第一外科・助教	田口 昭彦 大学院医学系研究科・病態制御内科学講座・助教
高見 太郎 大学院医学系研究科・消化器内科学・教授	竹下 幸男 医学部血液脳神経関門先進病態創薬研究講座・研究代表 大学院医学系研究科・臨床神経学・助教
宮本 達雄 医学専攻・分子細胞生理学講座・教授	田村 功 大学院医学系研究科・産科婦人科学講座・助教
田邊 剛 大学院医学系研究科 公衆衛生学・予防医学講座・教授	佐藤 俊 大学院医学系研究科・産科婦人科学講座・助教
山口 奈津 大学院医学系研究科 公衆衛生学・予防医学講座・助教	日下部 健 共同獣医学部・生体機能学講座・教授
中川 伸 大学院医学研究科（高次脳機能病態学）・教授	石井 治之 大学院創成科学研究科・循環環境工学分野・准教授
富永 香葉 大学院医学研究科（高次脳機能病態学）・助教	水上 洋一 大学研究推進機構（遺伝子実験施設）・教授
山田 典宏 大学院医学研究科（高次脳機能病態学）・診療助教	渡邊 健司 大学研究推進機構（遺伝子実験施設）・助教
松永 和人 大学院医学系研究科・呼吸器・感染症内科学・准教授	吉村安寿弥 大学院医学系研究科 （総合科学実験センター 生体分析実験施設）・准教授
平野 綱彦 医学部附属病 院・呼吸器・感染症内科・准教授	諫山慧士朗 大学研究推進機構（生命科学実験施設）・助教
大石 景士 医学部附属病院・呼吸器・感染症内科・助教	山本 健 大学院医学系研究科・保健学専攻・病態検査学講座・教授
土居 恵子 大学院医学系研究科・呼吸器・健康長寿学・特命助教	柳井 章江 大学院医学系研究科・保健学専攻・基礎検査学講座・准教授
木村 和博 大学院医学系研究科・眼科学・教授	

索引
人名

	氏名	研究タイトル	持続可能な開発目標 (SDGs)	ページ
あ	安達 圭一郎	心理的要因が心身の疾患に及ぼす影響と対人関係療法による介入効果の検討	3, 4, 5	02
い	伊東 美佐江	健康課題に関する意思決定支援と女性のライフコースに活かすヘルスプロモーション	3, 5, 10, 17	07
	稲光 正子	シグナル伝達機構の解明と疾患との関わり	3, 9	21
う	牛尾 裕子	「正解のない問題」に挑戦する力を育てる —メタ認知に着目し公衆衛生看護の思考を深める対話法—	3, 4	10
え	江藤 垂矢子	その人らしく生きるを支える看護 ～どう生きるかはどう死を迎えるか～	3	05
お	大津山 賢一郎	人獣共通感染症である猫ひっかき病の検査キットおよびネコに対するワクチン開発	3	20
	緒方 彩乃	子どもネグレクトのハイリスク家族への支援に関する研究	3, 16	11
	小野 聡子	共有意思決定によって患者の価値観に基づいた意思決定を支援する	3, 17	03
	小室 拓也	血流で紐解く心房細動 ～多領域複合的アプローチによる心房細動治療戦略の構築～	3	20
か	金重 里沙	抗リン脂質抗体による細胞依存性凝固反応の包括的検討	3	16
	紙谷 恵子	がんに罹患した女性の妊よう性に関する意思決定への支援	3, 5, 8	06
	亀崎 明子	女性のライフサイクル全般を支援する	3, 5	08
	河野 裕夫	①脳血液関門を制御する因子の検討 ②細胞診教育における遠隔教育の試み	3, 4	13
き	桐明 祐弥	心の可視化によって目指す看護・医療における質の向上 ～視線計測や心拍変動解析によってみる・明らかにする人間心理～	3, 4	03
く	沓脱 小枝子	希少染色体疾患児のための遺伝学的知見を取り入れた学校生活支援	3, 4, 10, 16	08
	Claudia Kam Yuk LAI	The MEDiterranean Islands Epidemiological Study – JAPAN	3, 10, 11, 17	22
こ	小林 由紀	環境中の薬剤耐性菌の現状と耐性遺伝子の伝播・消滅メカニズムの解明	3, 6, 13, 15	15
さ	齊田 菜穂子	がん予防とがん患者・家族のセルフケア能力を高めるための支援	3, 4, 11	04
	斎藤 美矢子	公衆衛生看護技術の可視化を目指して ～個別課題から地域課題への視点の展開技術を日常業務の中で向上させるモデル開発～	3	11
し	清水 勇輝	肺を造る ～ヒト成体肺組織における再生戦略についての研究～	3	16
す	末永 弘美	臨床検査技師だからこそ可能なリサーチ ～日常臨床におけるリサーチクエッションから新たな検査指標の開発を目指して～	3	19
	住田 靖子	日本の高齢化を支える介護人材のこれから —介護人材不足に対して何が出来るか—	3, 8, 11	12
た	田戸 朝美	臨床実践に基づいた看護師の呼吸ケア実践能力の解明と評価ツールの開発	3, 4	05
	田中 愛子	人生の最終段階を安心して過ごすためのケアとケアリングとケア体制の構築	3, 10	02
	田中 伸明	心臓超音波検査法の便利な使い方を求めて ～例えば時相計測からの大動脈弁狭窄症の評価～	3, 4	17
つ	堤 雅恵	よりよい高齢者ケアを目指して —看護研究は看護改善研究だ—	3	09

	氏名	研究タイトル	持続可能な開発目標 (SDGs)	ページ
つ	常岡 英弘	猫ひっかき病とその診断法に関する研究	3	22
と	富永 直臣	細胞同士の会話を聞いて体の状態を知る	3, 9	21
な	永田 千鶴	エイジング・イン・プレイス ～住み慣れた地域で、その人らしく、最期まで～	3, 11	10
に	西川 潤	消化器がんに関連する微生物を研究 ～胃がんを起こすピロリ菌や大腸がんを起こす歯周病菌を制す～	3, 9	14
の	野垣 宏	医学・医療の立場から高齢者、特に認知症を考える	3	09
	野島 順三	抗リン脂質抗体症候群の検査診断法の確立と病態発症機序の解明に関する研究	3, 4	13
む	村上 京子	Person-centered Care を実践する看護職を支える看護教育・研究への取り組み	3, 5, 10, 17	07
	村上 祐里香	COVID-19 世界的流行による健康危機において新人保健師の成長につながった経験	3, 4	12
も	本木 由香里	抗リン脂質抗体と酸化ストレスによる向血栓性作用の解明	3	15
や	柳井 章江	消化管における細胞内構造体“STB/HAP1”の病態・生理機能解明	2, 3	14
	山城 安啓	血色素異常症と溶血性疾患の病態解析	3	18
	山根 俊恵	SDS 支援システム開発 ～誰一人孤立させない社会をめざして～	3, 4, 11	04
	山本 小奈実	脳死下臓器提供する患者家族ケア	3, 4, 16	06
	山本 健	カルモジュリン制御で筋小胞体、小胞体ストレスを制御し、様々な疾患の治療に貢献する	3	17
	山本 美佐	神経線維腫瘍増殖メカニズム解明とマスト細胞関連蛋白阻害による新規治療法の開発	3, 10, 17	19
ゆ	湯尻 俊昭	血液学から生命現象の包括的な理解を深め、医療に貢献する	3, 4, 8, 9	18

持続可能な開発目標 (SDGs)

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



- 1 貧困をなくそう
- 2 飢餓をゼロに
- 3 すべての人に健康と福祉を
- 4 質の高い教育をみんなに
- 5 ジェンダー平等を実現しよう
- 6 安全な水とトイレを世界中に
- 7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに
- 8 働きがいも経済成長も
- 9 産業と技術革新の基盤をつくろう
- 10 人や国の不平等をなくそう
- 11 住み続けられるまちづくりを
- 12 つくる責任つかう責任
- 13 気候変動に具体的な対策を
- 14 海の豊かさを守ろう
- 15 陸の豊かさを守ろう
- 16 平和と公正をすべての人に
- 17 パートナリシップで目標を達成しよう

持続可能な開発目標 (SDGs) とは

2001年策定されたミレニアム開発目標 (MDGs) の後継として、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にて記載された2016年から2030年までの国際目標です。持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の誰一人として取り残さない (leave no one behind) ことを誓っています。SDGsは発展途上国のみならず、先進国自身が取り組むユニバーサル (普遍的) なものであり、日本としても積極的に取り組んでいます。

索引 キーワード

A ~ Z

Aged 22
 AIHA 18
Bartonella henselae 感染症 22
 Diet 22
 EB ウイルス 14
 EOLC 07
 EPA 介護福祉士候補者 12
 EPA 介護福祉士 12
 Epidemiology 22
 HAP1 (Huntingtin associated protein 1) 14
 HbA1c 18
 Health 22
 Hybri-probe 法 18
 ICU せん妄 03
 iPS 細胞 19
 Longevity 22
 MEKK1 18
 QOL 04
 Smad 21
 Social Distancing Syndrome 04
 stigmoid body (STB) 14
 TGF- β 21

あ

アイトラッカー 03
 アクティビティケア 09
 アミロイドーシス 13
 アルツハイマー型認知症 09

い

胃癌 14
 育児支援 08
 意思決定ガイド 03
 意思決定支援 06,07
 異常血色素症 18
 遺伝 07
 遺伝看護 08
 イムノアッセイ 16

う

ウィメンズヘルス 07
 うつ病 02

え

エイジング・イン・プレイス 10

か

介護人材不足 12
 可視化 03
 家族 07
 家族ケア 05,06
 家族心理教育 04
 カルモジュリン 17
 がん 04,21
 癌 21
 がん看護 05,06
 癌幹細胞 13
 環境 DNA 15
 看護学 07
 看護教育 07

看護倫理 07
 間接蛍光抗体法 22
 肝線維化 19

き

希少疾患 08
 教育的支援 12
 教育研修プログラム 10
 教育評価 05
 教育方法 05
 共有意思決定 03

く

クリティカルケア 06

け

ケアニード 05
 血液網膜関門 13
 血管内皮機能 19
 月経および月経周期期症状に関する教育 08
 血栓止血学 13,16
 血栓症 15
 血流解析 20
 ゲノム 21
 現任教育 11,12

こ

膠芽腫 13
 公衆衛生看護 10,11,12
 公衆衛生看護学 11
 抗リン脂質抗体症候群 13,15,16
 高齢者 09
 高齢者介護 12
 コーチングスキル 03
 骨格筋 21
 骨髄増殖性腫瘍 18
 子どもネグレクト 11

さ

細胞外小胞 (エクソソーム) 21
 細胞検査士 13
 細胞内シグナル伝達経路 18
 サラセミア 18
 酸化ストレス 13,15

し

シグナル伝達 21
 自己抗体 15
 歯周病菌 14
 実践知 06
 児童虐待予防 11
 就学 08
 周産期うつ病 19
 集中治療医学 05
 重篤・救急看護学 05
 終末期看護 05
 終末期ケア (人生の最終段階のケア) 02
 手術室看護 03
 腫瘍微小環境 19
 消化管 14
 小児 07

助産師教育……………08
心エコー……………20
新型コロナウイルス感染症……………02
心機能評価……………17
神経線維腫……………19
人工知能 (AI) ……19
人材育成……………10,12
心臓超音波検査 (心エコー図検査) ……17
心臓電気生理学的検査……………20
心拍変動解析……………03
心肥大……………17
心房細動……………20

す

睡眠・覚醒パターン……………09

せ

生活関係の清算……………02
生活習慣……………04
性感染症の予防……………08
セルフケア……………04
染色体異常……………08
全身性エリテマトーデス……………13
専門看護師……………06

そ

臓器移植……………06
早期発見……………09
造血幹細胞……………18

た

対人関係療法……………02
大腸癌……………14

ち

地域アセスメント……………11
地域看護……………11
地域密着型サービス……………10
超音波検査法……………19

て

電子顕微鏡……………14

な

難病……………08

に

認知機能低下……………09
認知症……………09
認知症スクリーニング検査……………09
妊よう性……………06

ね

猫ひっかき病 (CSD) ……20,22
猫ひっかき病鑑別キット……………20
ネコワクチン……………20

の

脳……………14
望まない妊娠……………08

は

バイオフィルム……………15
肺再生……………16
肺胞隔壁増生……………16
肺胞上皮細胞……………16
肺胞新生……………16
バルトネラ菌……………22
バルトネラヘンセラ (Bartonella henselae) ……20

ひ

ひきこもり……………04
非言語コミュニケーション……………05
微生物生態学……………15
悲嘆……………05
病気認知……………02
ピロリ菌……………14

ふ

フォーカス・グループ・ディスカッション……………10
不整脈……………17,20
フローサイトメトリー解析……………16

ほ

保健師……………10,11,12
保健所……………12
母子保健……………11

ま

マスト細胞 (肥満細胞) ……19
マンモグラフィ検診……………02

み

看取り……………10

め

メタ認知……………10
メタン酸化細菌……………15
メンタルヘルス……………04

や

薬剤耐性……………15

よ

予防……………04

り

リアノジン受容体……………17
リカバリー……………04
臨床推論……………07

る

ループスアンチコアグラント……………13

れ

レックリングハウゼン病……………19

ろ

老化……………21

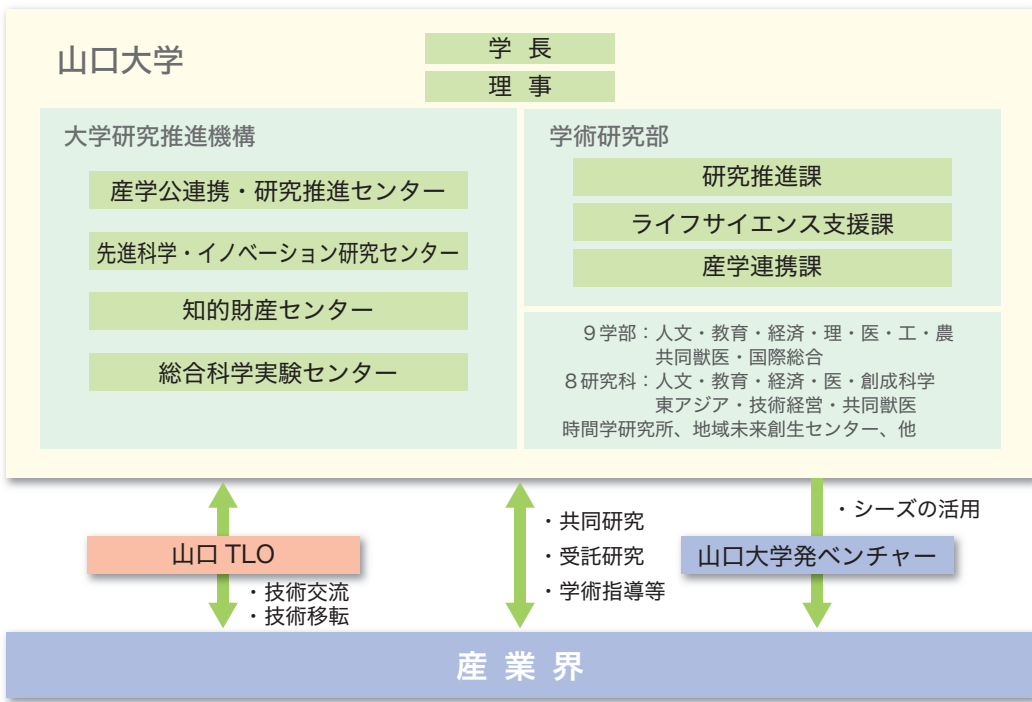
わ

笑いとユーモア……………02

山口大学の研究支援体制

山口大学では、大学研究推進機構を設置し、公的機関及び民間企業等との共同研究の推進を積極的に推進しています。

産学公連携・研究推進センターは、山口大学の研究力の強化と、本学が有する研究成果を社会に広く還元することを目的に設立された組織です。本センターは、産業界との連携の窓口として、またイノベーション創出の拠点として、産業界はもちろんのこと、自治体や関連団体等と連携しながら研究成果を社会に還元する活動を行っております。具体的な業務としては、大学における研究の応用と展開、企業から持ち込まれる相談への対応、大学の研究者と企業あるいは外部機関との連携（共同研究や学術指導制度）の促進、政府や自治体主導のプロジェクトの推進のためのサポート、知的財産の視点からのアドバイス、様々な機関から提供される情報のハブとしての役割、など多岐に渡っています。同センターには URA が配置されており、研究者への支援を総合的、効果的に推進しています。



医学系研究科保健学専攻研究者との
共同研究・産学公連携サポートに関するお問い合わせ

山口大学大学研究推進機構
(産学公連携・研究推進センター)

小串地区 〒755-8505 宇部市南小串1-1-1 医修館5F
TEL：0836-85-3065
E-mail：life-s@yamaguchi-u.ac.jp

大学院についての案内

2024(令和6)年4月山口大学大学院医学系研究科保健学専攻入学者選抜の概要

1. 入試日程

博士前期課程

出願資格事前審査 申請受付期間	2023(令和5)年6月7日(水)～2023(令和5)年6月13日(火)
出願期間	2023(令和5)年7月12日(水)～2023(令和5)年7月19日(水)
選抜期日	2023(令和5)年9月14日(木)
合格発表	2023(令和5)年10月12日(木)
入学手続き期間	2024(令和6)年3月1日(金)～2024(令和6)年3月5日(火)

博士後期課程

出願資格事前審査 申請受付期間	2023(令和5)年6月7日(水)～2023(令和5)年6月13日(火)
出願期間	2023(令和5)年7月12日(水)～2023(令和5)年7月19日(水)
選抜期日	2023(令和5)年9月15日(金)
合格発表	2023(令和5)年10月12日(木)
入学手続き期間	2024(令和6)年3月1日(金)～2024(令和6)年3月5日(火)

2. 教育・研究領域及び募集人員

博士前期課程

専攻	教育・研究領域	募集人員
保健学専攻	看護学領域	12名
	生体情報検査学領域	

博士後期課程

専攻	教育・研究領域	募集人員
保健学専攻	看護学領域	5名
	生体情報検査学領域	

3. 医学系研究科保健学専攻 入学試験案内について

詳細は募集要項及び医学系研究科 HP をご覧ください。

<http://www.med.yamaguchi-u.ac.jp/graduate/admission/>





Nursing and Laboratory Science
Graduate School of Medicine
Yamaguchi University

Research 2023



山口大学大学院医学系研究科保健学専攻
〒755-8505 山口県宇部市南小串一丁目1番1号
TEL (0836) 22-2111 FAX (0836) 22-2113
http://www.med.yamaguchi-u.ac.jp/health_sciences/

